

【翻訳】

全国市民連盟と社会主義者

伊藤 健市

はじめに

以下で訳出しているのは、マーガレット・グリーン (Marguerite Green) 著の *The National Civic Federation and the American Labor Movement, 1900-1925* (The Catholic University of America Press, Inc., 1956) の「第4章 全国市民連盟と社会主義者 (Chapter 4 The Federation and the Socialists)」である。ちなみに、同著の章別編成は以下の通りである。

序章

第1章 草創期 (以上, 第62巻第1号, 2017年6月)

第2章 指導体制と調停活動 (第64巻第1号, 2019年6月)

第3章 全国市民連盟と反労組を標榜する使用者 (第64巻第2号, 2019年9月)

第4章 全国市民連盟と社会主義者 (本号)

第5章 労働者のためのプログラム (以下, 次号)

第6章 福利厚生部と労働者

第7章 全国市民連盟に集った人々

第8章 急進主義者との闘い

第9章 自由放任への回帰

第10章 ラルフ・イーズリーの「労働者のアメリカ市民連盟」

第4章 全国市民連盟と社会主義者

我々は、全国市民連盟を粉砕し、ゴンパーズ流儀の「労組幹部」が、組合の意に適った、自分たちが属する階級に忠実な人間となるよう最善を尽くしている¹⁾。

ウェスタン・マイナーズ・マガジン (*Western Miners' Magazine*)

1) April, 1905. 次から引用。J. W. Sullivan and H. Robbins, *Socialism as an Incubus on the Labor Movement* (New York: B. H. Tyrrel Print, 1918), p. 87.

^N全国市民連盟^Cは、この国の社会主義の発展にとって重要な時期に歴史の舞台に登場した。世紀転換期に影響力と勢力を手にしたのに加え、抗議の時代や知識人による社会問題の原因究明、さらには労働組合主義の上げ潮によって涵養された社会主義は、1900～12年に「全盛期」に入ろうとしていた。1890年代を通して、社会主義運動の押しも押されもせぬリーダーは、社会主義労働党 (Socialist Labor party)〔訳注1〕の党首ダニエル・ドゥ・レオン (Daniel De Leon)〔訳注2〕であった。彼の当初の政治目標は労働組合の攻略にあった。1893年には、社会主義者への支持をアメリカ労働総同盟から得るのにほぼ成功したものの、サミュエル・ゴンパーズに対する個人攻撃が、社会主義の究極の目的にまったく共感しなかった彼の痛烈な恨みを買ってしまった。さらに歩を進めたドゥ・レオンは、社会主義職業労働同盟 (Socialist Trades and Labor Alliance) を立ち上げたことで、組織労働者の十戒のなかの最悪の罪——二重組合主義 (dual unionism)——に手を染めた²⁾。多くの社会主義者が彼の一挙手一投足に不安を掻き立てられ、その独裁者的な手法に敵意を抱いた。モリス・ヒルキット (Morris Hillquit)〔訳注3〕

2) Daniel Bell, "The Background and Development of Marxian Socialism in the United States," *Socialism and American Life*, ed. Daniel D. Egbert and Stow Persons (Princeton: Princeton University Press, 1952), I, 245-246, 252, 267.

〔訳注1〕社会主義労働党は、1876年7月15日に国際労働者協会 (International Workingmen's Association, 第一インターナショナル) がフィラデルフィアで解散して数日後に同地で誕生したアメリカ労働者党 (American Workingmen's Party) が、翌年、社会主義労働党と党名変更したものに、イリノイ労働党 (Illinois Labor Party) と社会民主党のラッサール派が合流して誕生した。社会主義労働党は、鉄道、電信、及びすべての輸送手段の国有化を要求するとともに、企業が政府の管理下に置かれ、全民衆のために自由な協同組織である労働組合によって運営されることを要求した。積極的に労働組合を支持し、労働組合を基盤に議会活動を行うとの立場をとっていた。本部はシカゴに置かれ、党機関紙はレイバー・スタンダード (*Labor Standard*) であった。1877年に発生した鉄道大ストライキでは、8時間労働制と鉄道国有化を掲げて積極的に運動し、シカゴではゼネストを組織した。同年、党名を北アメリカ社会主義労働党と変え、1879年には25州に1万人の党員を擁する組織となった。しかし、1889年に党内の分派闘争が頂点に達し、翌90年にダニエル・ドゥ・レオンが入党する。

〔訳注2〕1852～1914。オランダ領キュラソー島生まれ。コロンビア大学の国際法教授。1890年社会主義労働党入党。機関誌ピープル (*People*) を編集して同党を指導した。労働運動の社会主義的再編成の必要性を感じ、1895年に本文にある社会主義職業労働連盟を設立するが、セクト的な党指導のため、分裂を招く。この結果、社会主義運動の指導権を社会党に譲ることになる。革命的マルクス主義に立つ理論家で、サンディカリズムに接近し、1905年には世界産業別労働組合 (Industrial Workers of the World) の創設に参加した。

正統派マルクス主義者としての彼は、政党との連携による政治闘争を主張し、ストライキを擁護していた。「ビッグ・ビル」ヘイウッド (Willam D. "Big Bill" Haywood) らの直接行動派と激しい論争を繰り広げたものの敗北し、1908年にIWWの分派である労働者国際産業別組合 (Worker's International Industrial Union) を結成した。

〔訳注3〕1869～1933。ラトヴィア出身で1886年にアメリカに渡る。ニューヨーク大学で教育を受けた後、1888年に社会党に入党。97年には、右派指導者として左派と対立。右派が社会民主党(その後社会党)を創った時、全国執行委員会議長となった。社会主義インターナショナルの大会に党代表として7回連続で出席した。1917年と32年には社会党からニューヨーク市長候補に指名されている。

の指揮下にあった社会主義者の一派が、社会主義労働党（Socialist Labor Party）との関係を断って、社会民主党（Social Democratic Party）の1900年全国党大会で、ユージーン・デブス（Eugene Debs）〔訳注4〕が率いる中西部の社会主義者と合流した。社会主義労働党員も社会民主党員もともに分派に分裂していた。書面と口頭での罵詈雑言の応酬があったものの、その後1901年の社会党（Socialist Party）〔訳注5〕結成時に統合とでも言えるものに辿り着いた³⁾。

社会主義団体の編年史の内容が目まぐるしい転変だけなら、最終的に社会党を創り上げた、相反する議論好きの構成分子の存在を十分に理解できない。社会主義は、金権政治に対する怒りと一触即発の危険を孕んだ批判で満ち溢れた当時のアメリカで簡単に受け容れられた。社会党の多様な党員を構成したのは、ヨーロッパの社会主義理論の影響を多少なりとも受けてプロレタリア化した東部の労働者だけでなく、ヘイマーケット事件の「犠牲者」をこの国の革命の理想を体現した人物と考えたデブスのような西部の急進的な労働組合主義者であった。その平党員は、政治家や労組幹部はもとより、中産階級の転向者、プロテスタントの牧師と慈善事業労働者、男女の専門家、弁護士と著述家、中小企業経営者で次第に充満した⁴⁾。社会党は反体制派知識人を惹き付けると同時に、統一^U鉱山^M労働^W組合や機械工組合といった組合内でも成長し始めた1902年以降、社会主義者は次第に地力を発揮するようになった。反体制派知識人は社会党本来の勢力として党内に留まったが、急進的な組合分子は社会主義理論を最終的な結論まで押し上げ、1905年に世界産業別労働組合（International Workers of the World）を結成することで、結果的にはサンディカリズム的な傾向を表明した。「左」・「右」両翼の社会主義者、種々の党と組合の結成・再結成といったすべての混乱の背後には、社会主義を毛嫌いするようにな

3) Morris Hiliquit, *Loose Leaves from a Busy Life* (New York: Macmillan Co., 1934), pp. 47ff.

4) Ray Ginger, *The Bending Cross: The Story of Eugene V. Debs* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1949), p. 213. 以下と対比のこと。Bell, *op. cit.*, p. 269.

〔訳注4〕デブスについては、伊藤健市「ブルマン・ストライキとその余波」（『関西大学商学論集』第58巻第1号，2013年）を参照のこと。

〔訳注5〕社会党は、1901年に社会主義労働党から分離したヒルキット派とユージーン・V・デブスのアメリカ社会民主党が統一して誕生した。この社会民主党は、1897年6月にアメリカ鉄道組合（American Railway Union）が解体して誕生したアメリカ社会民主主義党（Social Democracy of American）の後継組織である。この社会民主主義党は、実行不可能な計画——西部の州で政権を獲得し、そこに社会主義を根ざす——もあって、社会主義的分子の反対派を生むことになる。同党は、1898年6月にシカゴで最初の大会を開いた際に内部分裂を起こし、少数派がアメリカ社会民主党（Social Democratic Party of America）を結党した。同党は急進的な労働者の綱領をもち、ユージーン兄弟のセオドア・デブスを全国書記に、1900年3月6日の最初の全国大会では党員数5,000人を誇った。この社会民主党に対し、先のヒルキット派が合同提案を持ち掛けたものの、デブスと党幹部は躊躇した。そこで、1900年の大統領選で統一候補を立てることで一致したのを契機に、1901年7月29日にインディアナポリスで統一大会を開催した。125名の代議員の内、70人はヒルキット派を、47人はデブス派を、8人は小グループをそれぞれ代表していた。同大会で、社会主義運動は統合され、社会党が誕生する。その目的は、政治権力を獲得し、生産・分配の私有制度を変革し、全人民による集団所有とすることにあった。

った、組織としての態勢を整えた労働組合主義の発展途上にある考え方はもとより、それぞれ異なるレベルにある社会主義原理間の関係があったのを見逃してはならない。

大部分の社会主義者は、社会は理性的な方向に進んでいるし、人類は自然を支配し始めており、いつかは社会を利用し、それを少数者の利益よりも公益に向けるであろうと論じた。もちろん、それがどのようにして達成されるかは、社会主義者自身も決定的に異なるさまざまな意見をもつ問題であった。しかし、少なくとも労働者階級が社会改革の幸運な媒介者であるのは明らかだった。ドゥ・レオンにとって、政治上の革命と経済上の革命は同時進行するものであり、その際には産業別組合が労働者解放の鍵を握ると考えた。投票権は、組合が生産と行政を統治し、各業界の代表者が議会で行う立法活動が、必要な富と生産できる富、それと不可欠な仕事の統計だけで指令されるこの文明国の武器になるはずであった⁵⁾。当初、彼は社会主義のために労働組合運動を攻略するには、内部からこの運動を切り崩すだけで十分だと考えた。最終的に、それでは不十分だと理解するようになり、政治面でも産業面でも社会主義に引きずり込むべく、外から組合に猛攻撃を仕掛けた。

社会主義者は、まさにこの問題で真っ向対立した。右翼の保守派は労働組合運動の内部からの切り崩しを主張し、独立した政治運動としては社会党を支援した。一方、保守主義的な傾向を強めるAFLに我慢できなかつた左翼急進派は、産業別組合主義を求めて闘った。AFLのマクス・ヘイズ (Max Hayes) は右翼の典型で、産業別組合主義と革命志向の社会党の擁護者で資本主義制度の痛烈な批判者であったユーージン・デブスは左翼指導層を代表する著名人であった。この左右両翼という2つの趨勢は一度も意見の対立とはみなされなかつた。社会主義者の意見は多様で、特に組合主義の問題に関しては多様な上に矛盾しており、AFL指導部が当時展開していた主張は社会主義者の混乱を大きくしただけであった。

AFLの初期指導部は社会主義的^{ドグマ}教義で教育を受けていた。彼らは、マルクス主義の政治力学はこの国の状況に適用できないのではとの疑念を抱きつつ、際限のない理論論争に耐えた。1890年代のゴンパーズは、ドゥ・レオンの教義の純粹さと党派的孤立とは逆に、プラグマティックで純粹でまじり気のない (pure-and-simple) 労働組合主義に力点を置く傾向があった。当初、ゴンパーズは戦術と組織戦略を理由に社会主義者と闘った。彼には、労働者が最終的に目指す目標はなく、私企業と国有企業の取り替えも支持しなかつた。彼は即効性のある改善を求めて闘い、労働者はその全精力をそうした改善の獲得に使うべきだし、それが曖昧でユートピア的な目的であったとしても止めるべきではないと主張した⁶⁾。より高い賃金、より短い労働時間、改良された労働条件を勝ち取れるのは、現時点では団結だけであった。社会主義者は、階級意識と産業別組合主義に対する熱烈な要求といった話ばかりして、労働者を誘惑して以下の点を受け入れさせないようにした。つまり、

5) *Ibid.*, pp. 246-247, 269.

6) *Ibid.*, pp. 248ff.

……社会主義者の扇動の悪循環をもたらす——労働者階級の窮状に対する反感情の爆発、前後の見境なしに行うストライキ、思いついたままの叱責、あらゆる種類的情緒不安定な不平分子との一時的な政治上の提携、ひどい結果があるいはばかばかしい結果ばかりが続く投票日への楽観的な希望、堅実な組合主義によって得られる当座の利益の消失、最終的には職業上の苦悩の当初のレベルへの逆戻り——といったものに対する規律ある組合方式……である⁷⁾。

社会主義者は、ゴンパーズは資本主義を受容しそれと交渉したと繰り返し語った。こうした主張の含意の検討は後で行うが、こう語る際に社会主義者は、AFL幹部が階級闘争理論を拒絶したことを強調した。常に現実主義者であったゴンパーズは、階級闘争理論が暗示する階級内連帯が労働者と使用者の双方にないのに気づいていた。組合主義がその勢力を四散すれば、結果は弱体化である。この考えに基づき、AFLは全力を注いで熟練労働者を職業別労働組合に組織した。社会主義者は、AFLが「この国の社会で恒久的な階級としての役割を受け入れ、その継続的な存在に向けた制度的枠組を創る最初の労働団体である」という極めて重要な事実を読み違えた結果、AFLの先の方針を後退とみた⁸⁾。初期の労働者団体は資本主義社会のその日暮らしの生活という基本的事実を受け入れようとしなかったし、社会主義者もそうしなかった。しかし、AFL指導部は社会主義者がみようともしなかったものをみており、この国の至る所で熟練労働者の組合が急進思想に染まることなく成長したので、知識人と改革運動家を避け、政治問題とは距離を置くと決めていた⁹⁾。熟練労働者のために、AFLは仕事量の供給統制を介して賃金労働者を保護する試みとして、労働協約を唱道した。これは「経済闘争中心の組合主義」を不可避なものとし、組織労働者を産業界の抱える市場問題にかかわらせることになる¹⁰⁾。ゴンパーズがこのビジネス・ユニオニズムを創出したのか。ルイス・S・リード(Louis S. Reed)はこうした考えを「まったくの戯言」として撥ねつけた。ゴンパーズと同様若かりし頃に急進論者であった人々は、ビジネス・ユニオニズムを当時の組合主義が基盤を置ける唯一のものとするようになった。彼らは、それまで長期にわたって進展してきた運動のリーダーになるか、労資の相互利益を推進するためには使用者と協力・協調するのを厭わない、労資間の利害の同一性の主唱者になった¹¹⁾。

ゴンパーズと彼以外のAFL幹部がNCFに加入するとの決断を下したのはこの段階でのことだった。この決断は、AFLが全国規模の合法集団で、この国の社会のなかで確立された制度として受容されるための彼らの計画の一部であった。

経済闘争中心の組合主義と産業別組合主義との対立、資本との協調という概念と階級闘争という概念との対立、団体交渉での合法的な武器だけの使用と過酷な闘争を犠牲にした産業別組

7) Sullivan and Robbins, *op. cit.*, pp. 6-7.

8) Bell, *op. cit.*, pp. 248-249.

9) Louis S. Reed, *The Labor Philosophy of Samuel Gompers* (New York : Columbia University Press, 1930), p. 73. 佐々木専三郎訳『サミュエル・ゴンパーズの労働哲学』東洋書店、1973年、76ページ。

10) Bell, *op. cit.*, p. 255.

11) Reed, *op. cit.*, pp. 15, 73-74. 前掲邦訳書、18、76～77ページ。

合主義の擁護との対立、この最後の対立だけを背景にすればNCFに対する社会主義者の姿勢がそこに投影される。社会主義者の暴力的な抗議に焦点を合わせるには、彼らが敵対してきたあらゆるものをNCFが代表していることを常に記憶に留めておかなければならない。資本との協調は至福千年王国がない、あるいは少なくともその到来の無限延期を意味し、協調は汚濁を意味し、階級闘争のすべての主義主張に反することを意味した。

それゆえ、NCFがその草創期から社会主義者の激しい敵意を感じたのは驚くことでもない。1901年5月7日のNCFの調停・仲裁委員会の最初の公開会合で、社会主義者は調停に関するスピーチに野次を飛ばしたと評された¹²⁾。別の会合では、社会主義者の政治宣伝を討議する試みもあった¹³⁾。だが、こうした一連の攻撃から得られるものは何もなかった。NCFの会員は、このようなやり方で自分たち流儀の「間違い」を納得させられると期待していなかった。さらに、これは真の社会主義者の目的でもなかった。社会主義者は、NCFが組合主義から強さを奪い、組合主義が合法的な目標に到達するのを妨げる資本家の秘密結社であったのを、労組幹部であれ平組合員であれ労働組合運動に得心させることだけを目的とした。

NCFの最初の精力的な調停活動は、好戦的な労働運動を構築しようとする社会主義者の試みと同時期に始まった。イーズリーと調停委員会が同情ストを防ぎ、USスチール社経営陣の譲歩を最大限活用しよう合同鉄鋼・錫労働組合 (Amalgamated Association of Iron, Steel and Tin Workers) のT・J・シェーファー (Shaffer) を説得するのに全力を傾けている間に、社会主義者のリーダーたちは、特に急進的な西部鉱夫連盟 (Western Federation of Miners) を介して産業別組合主義を擁護した。ほどなく社会主義者で政治家のユーージン・デブスとその信奉者は、NCFが「自分たちの計画にとって重大な脅威となる」¹⁴⁾と確信するようになった。デブスらは、労働組合と巨大企業は暗黙の合意に達していたし、組合が不熟練労働者や黒人労働者を組織しようとさえしなければ、企業は一定譲歩すると信じていた。

急進的な労組幹部は反撃の時とその方法について熟考を重ねた。最終的に、1902年5月の西部労働組合 (Western Labor Union) の年次大会で彼らなりの行動をとった〔訳注6〕。西部労働組合はAFLの対抗組織として、前身組織との関係を断った西部鉱夫連盟が設立した。ゴンパーズは対抗組合の設立を放棄し、元の鞘に戻るようにと空しい説得を試みた。彼は第二組合 (dual unions) で東部を侵略する西部労働組合の計略に対抗すべく、AFLの財務担当書記 (Secretary-Treasurer) の فرانク・モリソン (Frank Morrison) を年次大会に派遣した。デブスも来賓講演者としてそこにいた。

12) New York Times, May 9, 1901.

13) Ibid., October 17, 1903.

14) Ginger, *op. cit.*, p. 216.

〔訳注6〕西部労働組合の年次大会 (第3回) が開催されたのは、1902年6月で、その場所はデンヴァーであった。本文にあるフランク・モリソンが派遣されたのもこの6月の年次大会であった。訂正しておきたい。

モリソンはまず聴衆に向かって話し、AFLの方針を擁護し、二重組合主義は団結が必須である労働者の大義にとって有害だと非難した。デブスは彼に続いて、大量生産型産業で黒人と不熟練労働者の組織化を拒んだ職業別労働組合に対する全面攻撃を開始した。種々の組合が組織化に失敗したので、デブスは国際社会党（International Socialist Party）の旗印のもとで階級意識を有する政治活動に賛成の意を表明する熱のこもった演説で年次大会に勧告した。彼は、西部労働組合がアメリカ労働組合（American Labor Union）〔訳注7〕と名称変更し、社会主義に賛意を表明するよう助言した。デブスの攻撃は主にNCFに浴びせられた。彼はAFL幹部を、共和党を強固にし、支援する、とりわけハナの勢力拡大を目的にNCFと協力関係にあったと記述した。労働者が実業家の友人をもっているかのように振る舞うことで、ゴンパーズとジョン・ミッチェルは労働運動全体の足下を掘り崩した。使用者がより高い賃金と改良された労働条件の提供を厭わない場合に、なぜ労働組合が必要なのか。モリソンは後に、AFLの執行委員会に対し、デブスがゴンパーズ会長を「執拗に」攻撃し、「見かけ倒しの議論によって、デブスがハナとNCF会員となった労組幹部との協調関係(understanding)の意味を代議員に伝えよ

〔訳注7〕アメリカ労働組合が結成されるに至る経緯はこうである。1890年代は相次ぐストライキで幕を開けた。1892年7月には、合同鉄鋼・鈴労働組合がペンシルヴェニア州ホームステッドでカーネギー製鋼会社に対して大ストライキを打った。同じ頃、アイダホやコロラドといったロッキー山脈諸州（Rocky Mountain States）では、スト労働者と軍隊が武力衝突を伴うストライキが頻発し、双方に多数の死者が出た。これを指導したのは急進主義者たちで、彼らは1893年にモンタナ州ビュートで西部鉱夫連盟を組織した。1893年5月には、12万5,000人の炭鉱労働者が関係する炭鉱ストライキが発生し、UMWがその地歩を固めた。1894年には、ユーージーン・V・デブス率いるアメリカ鉄道組合（American Railway Union）が大ブルマン・ストライキを敢行し、ゼネストにまで発展した。

この西部鉱夫連盟は、1896年にAFLに加盟するも、1896～97年のコロラド州リードヴィル（Leadville）のストライキでAFLからの財政的支援が得られずに敗北し、1897年5月の年次大会でAFLを脱退する。その後、1898年5月には、ロッキー山脈諸州の労働者——不熟練労働者——を産業別組合に組織することを目的に、西部労働組合が創設された。AFLはこの西部労働組合を粉砕しようと画策する。訳注7にある1902年の年次大会で、AFLに取って代わる意図を込めてアメリカ労働組合に名称変更するとのデブスの提案を受け、代議員たちはこれに賛成票を投じた。委員長はダニエル・マクドナルド（Daniel McDonald）、副委員長はD・F・オウシェイ（O'Shea）、財務担当書記にクラレンス・スミス（Clarence Smith）がそれぞれ就いた。アメリカ労働組合は1903年に組合員10万人を誇ったが、その後財政難などさまざまな理由で減少する。なかでも、AFL内にいて社会主義のために活動していた社会主義者が、アメリカ労働組合を二重組合主義の受け入れ難い典型と名指ししたことの影響は大きかった。

1905年6月27日、シカゴで世界産業別労働組合が創設され、アメリカ労働組合は解散した。その主要構成団体は、西部鉱夫連盟（2万7,000人）、アメリカ労働組合（1万6,750人）、統一金属労働組合（United Metal Workers, 3,000人）、統一鉄道従業員友愛組合（United Brotherhood of Railway Employees, 2,087人）、社会主義職業労働同盟（1,450人）であった。この構成団体と各団体からの加盟人数に関しては、ウィリアム・Z・フォスター（William Z. Foster）の*History of the Communist Party of the United States*（New York, International Publishers, 1952.）を参照した（『アメリカ合衆国共産党史（上）』大月書店、1954年、124ページ）。ただし、社会主義職業労働同盟は1905年時点で1,500人を下回り、わずか600人にすぎなかったとの見方もある（Patrick Renshaw, *The Wobblies*, 1967. 雪山慶正訳『ウォブリーズ』（社会評論社、1973年）、54ページ）。

うとした」¹⁵⁾と報告した。こうした非難は社会主義者によって幾度となく繰り返され、最終的に労働組合運動に受容され、労働史家が繰り返すNCFの語り草の一部となった。

アメリカ労働組合の創設を求めるデブスの訴えはこの年次大会で熱狂をもって取り上げられた。しかし、デブスはオルグではなかったし、社会主義者内で対立し合う勢力に対処できなかった。アメリカ労働組合結成後3カ月も経たない内に、社会党の大分裂が公開論争のテーマとなった。デブスの行動を社会主義者にとって重大な戦術的誤謬と捉える「右翼」指導者はAFL内で権力の絶頂にあり、敵対する組合主義が自分たちの立場をかなり弱体化せしめると考えた。敵対していたにもかかわらず、デブスは「マーク・ハナのNCFに同化させられる」のを拒否した金属労働者の支持を固く信じていた。ただゴンパーズとAFLが彼らの時代遅れの方針を捨てて、資本主義体制に反対だと表明した場合には、彼はいかなる提携であれ考慮したであろう。NCFに誣し込まれた労働組合に対するデブスの怒号と社会党の執行委員会の保守的な委員との論争にもかかわらず、デブスはアメリカ労働組合とAFL内にいた社会主義者が急進的なプログラムを軸に手を組もうと思えばそうできると依然期待した。しかしながら、1902年以降に社会主義者がAFL内で急速に地歩を失ったという事実は、社会党内の亀裂を深めた。

1904年に情勢は緊迫し、「右」と「左」の両翼間で緊張が高まったので、デブスは問題を明確化し、自身の考えの支持者を獲得すべく『組合主義と社会主義 (*Unionism and Socialism*)』を執筆し、労働組合の初期の発展とそれを粉碎しようとする資本家なりの取り組みを解説した。その後、何人かの実業家が粉碎戦術を捨て、NCFを通して害のない路線に組合運動を誘導すべく、見せかけの友誼を装ったと主張した。熟練労働者に比較的高い賃金を払うことで、実業家は不熟練労働者を組織しようとする職業別労働組合のいかなる試みも買収した。デブスは、職業別労働組合は産業別労働組合との合流で統合されなければならないのはもとより、両組合がともに革命志向をもって賃金制度を打倒しなければならないとも主張した。

デブスの熱のこもった議論にもかかわらず、社会党内の分裂は修復されなかった。マクス・ヘイズが率いる右翼は、AFLの年次大会で社会党員はもはや種々の組合の執行部を掌握しようとはせず、社会主義者の票を求める運動だけで満足するだろうと宣言した。デブスにとってこんなばかげた話はなかった。彼は、AFLの保守主義が人から人へ伝播し、AFLが革命を志向する組合に変身できないとの結論が出てくるのを恐れた。アメリカ労働組合が短命だったから、ゴンパーズが容赦ない言葉で特徴づけた、この「まったく見込みのない運動に取り憑かれた救い難いリーダー」¹⁶⁾は、不熟練労働者を組織し、社会党の誠実さを守るであろう労働者の

15) F. Morison to the AFL Executive Council, Denver, July 2, 1902, 以下に引用されている。Sullivan and Robbins, *op. cit.*, p. 36. この大会の公式書簡を含む完全なAFL版は脚注4にあるR・ジンジャー (Ray Ginger) の著書の33ページにある。社会主義者版はジンジャーの同書218～19ページで説明されている。

16) Gompers, *Seventy Years*, *op. cit.*, I, 424. 『サミュエル・ゴンパーズ自伝』上巻, 日本読書協会, 1969年, 414ページ。訳文通りではない (以下, 同様)。

新しい団体の結成に傾倒した。1905年、通常の労働組合運動のもとでは活動できなかったデブスとその同僚の急進論者たちは世界産業別労働組合を結成した¹⁷⁾。

この間、NCFは保守派か急進派かにかかわらず、社会主義者の痛烈な批難の的であった。感情の起伏が激しいデブスは、悪の権化を探し回るなかで、マーク・ハナという「一人の人間の邪悪な戦術に起因する」、NCFの実態を社会主義者の世界に公開する決意を固めた¹⁸⁾。この間ずっと、AFL幹部とNCFとの間の「戯れ」の話題が繰り返され、社会主義系のあらゆる新聞で脚色された¹⁹⁾。労働者は、連邦議会で代表者を必要とした場合、「マーク・ハナやNCFと疑わしい関係にあるリーダー、あるいは階級的利害に立って何事かを行うよりも、指導者側にいる自身の役回りを考えるリーダーを避ける……」²⁰⁾ べきだと警告された。それが自身の権力にとって脅威となることから、ゴンパーズは組合内政治の反対者と評された。「あなた方労働者がゴンパーズとハナの好きにさせるなら、二人は労働問題を解決するでしょうが、それは二人のやり方で解決されたのであって、あなた方労働者のやり方で解決されたものではありません」²¹⁾。1902年の無煙炭ストライキに言及した際に、ある著述家はこのストライキが、「資本家階級の労働者副官」たるミッチェルの代わりに別の人物に指導されていたら、この国の労働者の解放を助けたであろうとの意見を表明した²²⁾。ゴンパーズとミッチェルは大富豪の資本家たちと飲食をともにしたと繰り返し描かれた。デブスは、*International Socialist Review* 誌でNCFを、餌食となった者に「我々の利害は同じである」と語った上で、むさぼり食うのを常とする猛獣と描写した²³⁾。IWWの支持者は、職業別労働組合が「市民（下剤）連盟（Civic (Physic) Federation）」との関係を通して、「片務的な仲裁案と『狡猾な協約（craft agreements）』を押しつけ……、労働者階級の熱望を曲解する手段」²⁴⁾の当事者になったと論じた。それで、IWWの創設時点で、急進論者が提案した団体に対するゴンパーズの反発は、彼がNCFの会員であることと辛辣に関連づけられた。

ベルモントの共同経営者の胸に動揺を掻き立てて、彼の背中のゴム製脊椎骨を冒す強い影響力のある原因は、西部鉱夫連盟の幹部が「Physic Fakiration」〔訳注8〕の考えに合わない別の攻撃的な労働団体の著名な幹部と協力して、産業別組合主義の堅実な基盤の上に労働者の組織を創る目的でシカゴ

17) Ginger, *op. cit.*, pp. 219-220, 236ff.

18) *Ibid.*, p. 220.

19) 社会主義系新聞からの多数の質問は以下に引用されている。Sullivan and Robbins, *op. cit.* これらNCF批判は1903~06年に執筆されたものである。

20) *Social Democratic Herald*, April 25, 1903. 以下に引用されている。*Ibid.*, p. 62.

21) シカゴのコロセウムでのデブスの講演（日時不明）。以下に引用されている。*Ibid.*, p. 67.

22) *New York People*, January 19, 1905, 以下に引用されている。*Ibid.*, p. 67.

23) 以下からの引用。Ginger, *op. cit.*, p. 242.

24) *New York Labor Library*, February, 1905, 以下に引用されている。Sullivan and Robbins, *op. cit.*, p.86.

〔訳注8〕もちろんCivic Federationを振ったもの。

で年次総会を招集したという事実にあった……²⁵⁾。

NCFに対する社会主義者の酷評のすべてが有する特徴は基本的に同じものであった。それゆえ、そのなかのいくつかを読めば、すべてを読んだことになる。だが、社会主義者はその大言壮語だけを基準に評価されるべきではない。彼らは時に応じてより効果的な武器、組織労働者に関してNCFをとりわけ厄介な立場に追い込んだ結果、その潜勢力が強化された武器、を使えた。団結が組合主義の真髄だったし、一般の労働者は社会主義者でなくとも、資本主義に関するどのような政治宣伝にも大いに影響を受けた。それで、社会主義者のNCFに関する酷評は聴衆に待ってましたとばかりに受け入れられた。

社会主義者は1905年にIWWが創設されるまでの数年間、特に喧しかった。また、彼らの痛烈な批難は新聞に限られたものでもなかった。彼らはNCFに反対する決議を通すべく、多くの場合、組合集会に出ている少数派保守系組合員を利用した。そうした決議の1つが、委員長にNCFを脱会するよう求めた鑄造工組合 (Iron Molders' Union) で承認されたが、当該委員長が求めた全国規模の投票でこの決議は否決された²⁶⁾。社会主義者が非常に強い力をもっていたニューヨーク中央連合組合 (Central Federated Union of New York) は、全組合員のNCFからの脱会を求める決議を承認した。この決定に影響を受けた人々は、脱会命令を調査する委員会の任命を求めた。この間、「ニューヨークでは15万人の労働者がNCFと袂を分かった」話が世間に広まった。NCFの労働者側会員は激怒し、中央連合組合は「良識ある方法で態度を明らかにすべきだ」し、そうした世評に対抗しなくてはならないとの結論を下した。同組合の委員会は徹底的に調査し、NCFの活動が組織労働者にとって非常に有益であると報告した²⁷⁾。

折に触れ、ゴンパーズは自身のNCFとの関係を社会主義者の皮肉や悪口から守らなければならないと感じた。そこで、1905年2月のアメリカン・フェデレイションист (American Federationist) 誌の論説で、NCFは労働者が信念を委ね、判断の自主性を譲り渡した団体でなかった点と、NCFの決定には拘束力がなかった点を力説した。NCFは、組織労働者と使用者の代表の間で、NCFでなければできなかったであろう数多くの協議を実現し、多数の争議回避を支援し、意見の相違の調整に向けた御膳立てをした。こうした協議が労働者に有害だった事例はない。労働組合主義者が追い求めた針路はいかなるものであれ「大喜びで」曲解したのは、自分たちの予測に根拠がなく、自分たちの考え方の論拠の薄弱さを知っていた社会主義者のほうであった。NCFの使用者側会員が労働者の敵であったとしても、「使用者と対面せずに、そして、組織労働者が拠り所とし、近代社会を成り立たせている主張と要求を使用者と同様、

25) *Western Miners' Magazine*, April, 1905.以下に引用されている。Ibid., p.87.

26) *NCF Review*, II (May 15, 1905), 10.

27) R. Easley to J. Mitchell, New York, April 27, 1905, M-CUA. 言及されている労働者の信じ難い数は、多くの組合員を代表したかもしれない、信頼できる労組幹部にとって社会主義者の著述家による皮肉な言及であった。

決然かつ巧みに提示せずして」²⁸⁾、どうすれば労働組合主義者はその置かれた立場を議論できるのか。

1909年以前には、NCF首脳は社会主義に対する直接攻撃にそれほど関心があるようには見えなかった。彼らは、NCFのことで頭が一杯で、自分たちの活動の強化で保守的な労組幹部の奮闘を支えれば支えるほど、一般労働者の間に潜む社会主義の脅威に対してより大きな仕事ができるとおそらく考えていた。イーズリーは折に触れてNCFレビュー（NCF Review）誌にこの問題に関する論文と論説を執筆し、そのなかで反労組を標榜する使用者と社会主義者とを対比したが²⁹⁾、これについてはすでに言及した。1907年、ウィリアム・H・マロック（William H. Mallock）〔訳注9〕が、NCFの公開講座局（public lecture bureau）の後援で招聘され、社会主義について一連の講義を行った。講義は、コロンビア、ハーヴァード、ジョーンズ・ホプキンス、ペンシルヴェニア、シカゴの各大学で行われた³⁰⁾。この戦術は労働運動の内部にいた社会主義者の影響を減殺するものとは大きく異なった。だが当時、急進的な労組幹部の多くがIWWに加入する一方で、社会党内で増加したのが知識人だったことは記憶に留めておかなければならない。社会主義が変容するのに伴って、次第にNCFの応射圏内に入ってきたのである。

イーズリーは1909年初頭に反社会主義の強力なキャンペーンを検討し始めたようである。NCFレビュー誌の同年7月号の内容は、社会主義の普及に対する警告とAFLがそれに対してとった立場の擁護とがほぼ相半ばしていた。主要労組の代表が社会主義に反対と公言したと大きく取り上げられた。あるコメンテーターは、NCFは「労働組合主義か国家社会主義かの選択を世間が必要としている点」を明確に認識していて、「労働組合はこの国の諸制度と合致し

28) 以下に引用されている。Sullivan and Robbins, *op. cit.*, pp. 77-78. 社会主義者のヴィクター・バーガー（Victor Berger）がその同じ年のAFL年次総会で、NCFは「偽善者だった」し、NCF内での労組幹部と資本家との親密な関係は組織労働者の利害と真っ向対立していたという趣旨の決議を紹介した。組織委員会（Committee on Organization）がこの決議について悪し様に報告した時、この決議はほとんど議論されることなく却下された。AFL, *Proc.*, 1905, pp. 159, 182.

29) 社会主義へのイーズリーの関心はシカゴで経験した改革運動から始まった。1899年のトラスト会議には、社会主義者と「達観した無政府主義者」が一人ずつ招待され、審議中の問題に関する見解を述べるよう求められた。R. Easley to A. Cummins, September 26, 1911, copy, E-NYPL. 後にゴンバーズは、「産業平和を維持する取り組みに敵対する」人々をより良く理解できるよう、社会主義者の会合に出席することをイーズリーに勧めた。S. Gompers to R. Easley, February 3, 1902, copy, G-AFL. 念のため付言しておくが、ここで言及されている1899年のトラスト協議会はシカゴ市民連盟の後援下で開催されたものである——伊藤。]

30) W. H. Mallock, *Socialism* (New York: NCF, 1907).

〔訳注9〕ウィリアム・H・マロックは、オックスフォード大学出身の小説家。代表作は1877年に発表した*The New Republic*である。NCFは、アメリカの諸大学での講演と、おそらくは大学間社会主義者協会（Intercollegiate Socialist Society）の活動を相殺する目的で、イギリスから彼を招聘した。アメリカの諸大学での講演は、脚注30で取り上げられている『社会主義（*Socialism*）』とのタイトルでNCFによって刊行され、広範に配布された。

ていることから、その大義を社会主義者の政治宣伝の解毒剤として慎重に擁護した³¹⁾と解説している。全国製造業者協会のジョン・カービィは、同協会の会長職への指名受諾演説でNCFに対する厳しい非難の声をまさに上げたところだった。好戦的な労働組合の排除というカービィの狂信的な要求は、NCFの保守主義を際立たせるのに一役買った。彼が、「我々は、人間愛のために提供していると人々が考える、この博愛主義的な支援がなかったとしても労働問題に対処できる³²⁾と語った時、カービィも社会主義者特有の階級的優越意識から来る自信過剰に陥ったとみなされた。

社会主義に対抗するNCFのキャンペーンは1909年まで本格的に着手されなかった。これは、統一州法や複数の州で組織された支部を活用してNCFの影響力を拡張するプロジェクトにNCF首脳が執心していたという事実に起因していた。彼らは、NCF特有の運動を支えてくれる一触即発の潜勢力がAFL内で誕生していたことにまったく気づいていなかった。事態はAFL内では1911年まで危機的状況に達しなかったが、話全体の鍵となる人物がミッチェルだったので、ここで1908～1911年の彼とNCFとの関係史を提示しておくことは重要な意味をもつ。

UMWの指導者として、低迷する産業状況下で鉱業が大打撃を被っていた時期に、ミッチェルは悲惨な結果となったストライキの責任を負わなければならなかった。彼のとった方針に対する不満が高じ、UMWの完全支配を狙っていた副委員長のトム・ルイス (Tom Lewis) が声を上げた。責任が重荷になるにつれ、ミッチェルの飲酒量が度を超した。1907年のUMW年次大会で、強い批判から自身の方針を守り抜いた後、複数回の手術を余儀なくされ、最終的に神経衰弱を患ったものの、そこからは徐々に回復した。こうした状態が重なって委員長職から退くとの決断を固め、1908年の委員長選には立候補せず、かのルイスが委員長に就いた。

ミッチェルは10年にわたって炭鉱夫を率いた。この間にUMWは見事な成長を遂げた。絶え間ない闘争、勝利と敗北もあった。彼は絶賛と失望をともに経験したが、当時38歳であった彼は、この時点で失意の人になってしまった。UMW委員長としての俸給はわずかなものだった。1903年以前は1,200ドル、それ以降は3,000ドルに引き上げられた。炭鉱夫は引退した彼に6ヵ月分の俸給を支給することに賛成票を投じたが、ほぼ貯金を使い尽くし、妻と養うべき4人の子どもがいたという事実と照らすとそれは微々たる金額だった。体調は、鉱山に復帰できるものではなかったし、可能だったとしてもそれはなかった。声望は不快ではなかった。彼は依然として高い評価を得る全国的著名人だったし、労働運動がともかくも彼を必要としているとの気運は横溢していた³³⁾。

病気は治ったものの依然入院していたミッチェルは、1907年10月初めにイーズリーにNCF

31) Taylor, "Industrial Survey of the Month," *loc. cit.*, 668-669.

32) *Ibid.*, 670.

33) Elsie Gluck, *John Mitchell* (New York: John Day and Co., 1929), pp. 157-239.

で定職に就ける可能性を打診した。当然のことながら、引退後の彼はもはや労働運動の顔役ではなかったが、「それでも、私たちの個人的な関係からすれば、私の言い分をあなた方は考慮してくださると考えています」。ミッチェルは、NCFがあまりにも多くの副業に手を染めていたので、当初の活動である産業平和の推進に立ち返るには、組織の再編成を遂行する必要があるとの見解を表明した。「後に続くことをあなた方が誤って解釈されないよう私は願っています——あなた方は誤解されないと私は確信しています——、それと言うのも私はNCF内で職を求めているわけではないからです。しかし、NCFを堅実な基盤の上に置こうとされ、そして、私が調停部を担当するのが得策とみなされ、満足できる条件であれば、……私は喜んでその職に就きます」³⁴⁾。

イーズリーはミッチェルの提案に全面的に同意した³⁵⁾。彼は、どうすればミッチェルがNCFの活動を最大限支援できるのかを理解すべくその内容を精査し、ミッチェルの肩書きを労働協約部座長とするとの決断を下した。同部が思ったスピードで発展しなかった場合でも、「ミッチェルは、おそらくNCFと他の委員会の活動を支援するのを厭わないだろう」とイーズリーは示唆した。執行委員会が、「NCFを偉大なる全国規模の組織にするとの決意で意見の一致をみる」所に今や到達していたので、付属組織の結成に伴ってやるべき数多くの仕事があったし、イーズリーはミッチェルがこの点で自分を助けてくれるとおそらく思っていた³⁶⁾。2月末までに、ロウ会長は年俸6,000ドルを基準に、ミッチェルにNCFでの職を正式にオファーした。ミッチェルは現下の肩書きである労働協約部座長を保持し、「特に労働協約の考えを展開する際と、この国のすべての地域でNCFを強化する際に……」³⁷⁾、力の及ぶ限りのやり方でNCFを助けようとした。彼は、「NCFでの仕事をこれまで以上の好感をもって」受諾し、ロウとその同僚の賛意をもって働けることを次のように全面的に信じた。

NCFの労使関係部が労働協約に基づくものになるにつれ、その活動は産業平和運動の最も高貴で最良の構想と完全に一致するであろう。NCFがこの国における産業平和の公認の法廷になることを切望している。社会の全階層を代表する1つの偉大な団体が、この国の国民の好意的な協力を得ることで、政府が設置したいかなる部局よりも産業平和の維持において効果的であることを証明できると信じている。しかしながら、社会的信用を確保し維持できなければ、最終的に、労働争議における政府の介入を必要とする方向に事態が動くかもしれないという事実を忘れてはならない³⁸⁾。

NCFのオファーをミッチェルが受けるのは確実視されたが、1908年1月から4月まではUMW委員長を務めていたので、この件は発表されなかった。その間、別の展開があった。ロ

34) J. Mitchell to R. Easley, LaSalle, Illinois, October 21, 1907, copy, M-CUA.

35) R. Easley to J. Mitchell, New York, November 1, 1907, M-CUA.

36) *Ibid.*, New York, February 1, 1908, M-CUA.

37) S. Low to J. Mitchell, New York, February 21, 1908, M-CUA.

38) J. Mitchell to S. Low, February 24, 1908, copy, M-CUA.

ーズヴェルト大統領が、ミッチェルを労働弁務官 (Labor Commissioner) としてパナマに派遣することを真剣に検討していたのである。炭鉱夫の間では、ミッチェルは大統領が提示する要職を引き受けるのではと評判になった。「自国民がだまされないよう」、その話は嘘だとミッチェルは公表し、任期切れまで将来の活動分野について何も決定しなかった。任期切れまで正式オファーを待つよう求めたミッチェルは、その時点でローズヴェルトとタフト長官にこの件を相談するつもりであった。「かなりの権限」がなければ、パナマの労働情勢に時間と労力を割くことは考えられなかった³⁹⁾。ミッチェルがオファーを断ったのはおそらく3つの要因のせいだった。健康状態、NCFが提供した役職、最後に、選挙年であった1908年の春と初夏に受けた魅惑的な国政上の提案である。

5月後半、ミッチェルはNCFで一定期間雇われる見込みに関する確報をロウ会長に求めた。この件で、早めの行動を必要とする事態がイリノイで起こった。労働組合主義者とイリノイの民主党系団体の幹部の双方から、ミッチェルを知事選の候補者にするとの声が上がったのである。共和党の分裂と組合の支援が重なれば、彼の選出が現実味を帯びるものとなる。個人的には行政官にはほとんど魅力を感じておらず、別の分野ならより大きな仕事ができると思ったが、正当な理由なく火急の要請、特に労働者からのそれを拒むのは難しかった。立候補を断わる決断を下した場合でも、労働協約部を担当する準備は完了していたので、少なくとも何年かは産業平和の推進に邁進すると語れるのが支えになった。一方、国政にかかわると決断した場合、NCFはほかの誰かと同部の仕事を準備する立場に置かれる⁴⁰⁾。

イーズリーは、3週間後に8,000ドルの俸給でNCFに世話になるとの回答をミッチェルから受け取った。この金額は十分満足できるものだったが、ミッチェルは非常に微妙な立場にあった。イリノイ州知事選の候補という気持ちの動揺に加えて、彼をウィリアム・J・ブライアン (William J. Bryan) の副大統領候補として民主党の公認候補者にする人気取り運動 (boom) が始まっていたのである。ミッチェルは、NCFが提示した契約条件について何も語らないのが、自身とNCFの双方にとって非常に重要だと考えた。金のために主義主張を捨てるのは彼の本性ではなかったし、NCFからの魅力的な提案のせいで立候補を拒否したと世間が信じるなら、それはそれで彼に恥しい思いをさせたであろう⁴¹⁾。

あれこれ思案していたこの時期に、ミッチェルはAFLの第一副会長ジェームズ・ダンカン (James Duncan) から、NCFの役職のほうが国政上のオファーよりも「はるかに適している」のがわかるようになると説得された。「私は、あなたがNCFの労働協約部を選ばれ、それを運営されるのであれば、友人や労働運動の同志が真の前進の証しと理解されるのと同時に、安心されると躊躇なく言えます」⁴²⁾。最終決断の理由が何であれ、ミッチェルは6月25日に知

39) J. Mitchell to R. Easley, LaSalle, Illinois, November 20, 1907, copy, M-CUA.

40) J. Mitchell to S. Low, Chicago, May 27, 1908, M-CUA.

41) J. Mitchell to R. Easley, Chicago, June 17 and June 21, 1908, copies, M-CUA.

42) J. Duncan to J. Mitchell, Quincy, Massachusetts, June 22, 1908, M-CUA.

事選出馬を断わったことと、NCFでの役職に就任する準備が8月1日には整うことをロウに伝えた⁴³⁾。ローズヴェルト大統領がこれを耳にした時、イーズリーへの手紙にこう書いた。「それは非常に良いニュースです。引き受けた場所で、ミッチェル氏はこの国全体に多大な貢献をされると思います……」⁴⁴⁾。

ミッチェルは、NCFが勢力を拡大した3年間そこで働いた。だが、この3年は調停活動の最低調期で、労働協約の受容を拡大する機会がほとんどなかった3年でもあった。おそらくミッチェルは「道草を食った」と感じた。彼の伝記作家エルシー・グルック (Elsie Gluck) は、NCFでの活動は幻滅でしかなく、まだ若かった彼に「精神の退廃」という傷跡を残したと断定している。グルックはミッチェルがゴンパーズに宛てた手紙 (1910年8月9日付け) を引用している。そのなかでミッチェルは、実業界や金融業界への影響力を通して、自身の活動が成果を上げた事例を挙げている。しかしながら、これは調停部の活動で彼の職分ではなかった。彼は、それまでの貢献に満足していなかった。組合が組織されていた業界の使用者と労働者は、自分たちで問題を解決できた。労組幹部が未経験で一部の労働者が組合に組織されていた業界では、使用者はオープン・ショップを求めて闘っており、ユニオン・ショップ賛同者として有名だったミッチェルは不利な立場に立たされた。組合委員長として著名だったせいで、仲介役は幾度となく拒否され、請われるのはストライキが半ば負けた時だった⁴⁵⁾。

1910年、ミッチェルはイーズリーとこの国を1年掛けて旅行した。二人の尽力の結果、24の州でNCFの州協議会が組織された⁴⁶⁾。イーズリーはこの友人のためにいくつかの目標を設定しようとしたが、快活なイーズリーが関わっている限り、オルグが二人もいらないと内省的なミッチェルが確信したのはおそらくこの時のことであった。ミッチェルのそれまでの人生はあらゆる点で献身的だった。対立する勢力間の緊張関係の巻き添えを食ったり、調停したり、手厳しい判断を下したり、ある時は感情に別の時は理性に訴えたりした。そうしたことで彼の心は廢れたが、「大義」には価値があった。組合活動の本分を守ろうとした彼は、組合大会で代議員を務める機会を捜し求めた。

その間に、トム・ルイスのリーダーシップに対する猛烈な怒りがUMWの平組合員の間にも充満した。高圧的になった彼は、抵抗した幹部を解任し、UMWの機関誌は来る選挙に向けた運動用パンフと化した。彼は、ミッチェルがこの高まる抵抗に一枚噛んでいると思っていたし、ミッチェルが依然AFL第二副会長であったという事実を好ましく思っていなかった。AFLの執行委員会はルイスを信用しておらず、UMW委員長としての地位を長期にわたって保持するとは考えなかったが、ミッチェル再選阻止に向けた口実は、バックス・ストーヴ・アンド・レンジ社事件 (Bucks' Stove and Range Case) で刑に処せられているというもので

43) J. Mitchell to S. Low, Spring Valley, Illinois, June 25, 1908, copy, M-CUA.

44) T. Roosevelt to R. Easley, Oyster Bay, New York, June 28, 1908, E-NYPL.

45) Gluck, *op. cit.*, pp. 227-228.

46) *Supra*, p. 78.

あった〔訳注10〕。ミッチェルは、1910年にUMW内の選出議員団に関する重大時局でルイスと対峙するまで、猜疑の真の理由を彼に明かさなかった。1911年1月の年次大会で委員長選に負けたルイスは、同大会の議長役としてミッチェルに意趣返した。

ミッチェルは長い間、UMW内外から批判があるのを知っていた。これは本当で、とりわけNCFとの関係ではそうだった。1902年の炭鉱夫の勝利を相当後援するなど、NCFは炭鉱夫を支援したが、これは瞬時に忘れ去られた。社会主義はUMW内でかなりの力をもっていた。組合内闘争あるいはミッチェルの方針の失敗が、資本家と酒を飲み、食事をするなど、「麻醉で催眠状態にされていた」とか、「資本家階級の偉ぶる小者」として使用者のために働いたといった、社会主義者のかつての量句を常に蘇らせた⁴⁷⁾。ルイスは社会主義者ではなかったが、ミッチェルへの嫉妬で、「……機会があればいつも、NCFを介してミッチェルに一撃を加える」好機を利用した⁴⁸⁾。ミッチェルがUMW委員長よりもはるかに高い俸給でNCFに雇われた時、一撃を加えるのはより容易になった。平組合員が、ミッチェルが使用者に「転身した」事実を信じるか、あるいは少なくとも疑念を抱くのは至極当然だった⁴⁹⁾。ミッチェルが炭鉱経営者からダイヤモンドの指輪——ミッチェルの貢献に対する感謝の意としてUMWから贈呈されたもの——を受領したとの社会主義者の主張は、だまされやすい人間には一定の影響を及ぼした。NCFの「懇親会」でオーガスト・ベルモントやマーカス・M・マークス〔訳注11〕と同席するミッチェルと別の労組幹部に関する社会主義系新聞の生々しい描写は、特に豪華な食事が労働者の「餓死寸前の」質素な常食と対比された時には影響がない

47) Gluck, *op. cit.*, pp. 228ff., 173ff.

48) R. Easley to S. Low, New York, January 25, 1911, L-COL.

49) UMWの不屈のリーダーであったマザー・ジョーンズ (Mother Jones) は、後にJ・ボーデン・ハリマン夫人 (Mrs. J. Borden Harriman) にこう打ち明けた。「素晴らしい人でしたわ……。かわいそうなジョン、彼は金持ちと一緒に祝宴に招かれるのが我慢できなかったのよね。彼はもはや炭鉱夫にとって何の役にも立たないのよ」。Harriman, *From Pinafores to Politics* (New York: Henry Holt and Co., 1923), p. 173. このマザー・ジョーンズ (本名メアリー・ハリス) は、炭鉱労働者の闘争に献身した女性で、ストライキ中に「婦人部隊」を結成し、モップや箒を振り回してスト破りを蹴散らした——注、訳者。]

〔訳注10〕 バックス・ストーヴ・アンド・レンジ社は、全国製造業者協会会長のジェームズ・ヴァン・クリーヴが社長を務める会社であった。同社は、金属研磨工と鍛造工が労働時間の延長を拒んだ折りに、彼らを解雇した。鍛造工国際組合やAFLが調停に乗り出したが、その見込みが立たなくなった時点で、AFLの執行委員会は同社製品を不買品としてアメリカン・フェデレイション誌でその一覧を公表する決定を下した。それは、サミュエル・ゴンパーズによれば、製品の不買を呼びかけるものではなく、同社が紛争中の労働者に公正を欠く態度をとったことを周知するものだった。しかし、同社は、これを同誌を始め、いかなる場でも公表するのを差し止める禁止命令を裁判所に出させるのに成功した。この禁止命令は、回状、書簡、口頭または印刷物で紛争に言及するのを一切禁じていた。禁止命令の乱用を危惧したゴンパーズは、乱用が目立つ禁止命令を試訴 (テスト・ケース) として選ぶことを決めた。AFLが同社の事例をテスト・ケースに選んだのは、乱用のすべての面を含んでいたからだ、同社はAFLを相手取って禁止命令訴訟を起こした。

〔訳注11〕 第2章の訳注17を参照のこと。

はずはなかった⁵⁰⁾。

攻撃材料が手元に揃ったので、ルイスはそれを情け容赦なく使った。ミッチェルは1911年1月のUMW年次大会を欠席せざるを得なくなった。バックス・ストーヴ・アンド・レンジ社ボイコットへの関与で懲役刑が迫る状況のもと、ミッチェルは合衆国最高裁判所で自身の立場を弁護した。同社社長が、オープン・ショッップを明確に表明する使用者で、全国製造業者協会^Nの会長と市民産業協会の副会長を兼務するJ・W・ヴァン・クリーブだったので、情勢はなおさら印象的なものとなった⁵¹⁾。後にミッチェルは個人の立場に立って状況を生々しく描写した。彼と気脈を通じる人々は、政府が彼に影響力を行使するまで、そして、労働者の敵が彼とその同志および組織労働者を糾弾する声を聞きながらミッチェルが最高裁に出廷するまで待った。ある新聞記者が法廷にいたミッチェルの元に来て、招集した年次大会で、UMWが彼を弾劾するとの内容の電報を手渡した。ミッチェルが電報を読んだのは、NAM顧問弁護士のJ・J・ダーリントン（J. J. Darlington）がいかにもミッチェルが危険な人物であったかを法廷でまさに話していた時だった。「私たちが法廷に着座し、手と足を組んだ、まさにその日のその時」に、ミッチェルのNCF加盟に関する決議が炭鉱夫によって検討されていた⁵²⁾。

決議委員会（Committee on Resolutions）の報告書は、炭鉱夫の年次大会における寝耳に水の出来事であった。委員会は複数の決議を検討した。そのいくつかはNCFを非難し、こうした批難を次回のAFL年次大会で取り上げる決議のテーマとすることを要求した。もう1つの決議はAFLの活動に言及しておらず、NCFに加入していた唯一のUMW役員であったミッチェルの即刻の除名を単に規定するものだった。検討中の4つの決議の代替案として提案された決議委員会の多数派の報告書はこう宣言している。

……NCFと関係する全UMW組合員は、その関係を断つことを下記の通り定める。

決議。UMW組合員各位は、今後、前記のNCFに加入するか、あるいは金銭的もしくはそれ以外の方法で支援を受けることを禁ずる。これを犯せば除名となる⁵³⁾。

決議委員会の少数派の報告書は、ミッチェルはNCFに関する決定で影響を受ける唯一のUMW組合員であったし、UMWの誉れ高い委員長だった当時、彼がNCFのために尽力したことで、刑期を勤めなければならないかどうかを最高裁判所で審問されなければならないし、さらに、NCFがUMWの方針を指図する権限をもたずに、「この国の偉大な労働運動」と直接的に提携してもいないから、NCFに対する訴訟は「NCFに対する非難の代わりに、前委員長ミ

50) S. Gompers, "Organized Labor and the National Civic Federation," *American Federationist*, XVIII (March, 1911), 182-183.

51) Perlman and Taft, *Labor Movements, op. cit.*, p. 155.

52) ミッチェルのAFLとUMWの年次大会での種々の講演。AFL, *Proc.*, 1911, p. 230; *Proceedings of the 23rd Annual Convention of the United Mine Workers of America*, Indianapolis, January 16 to February 2, 1912 (Indianapolis: Cheltenham-Aetna Press, 1912), I, 464. 以降はUMW Pro.と略記し、刊行時を付記する。

53) 1月26日の年次大会の部会で明らかにされた決議のMS copy. G-AFL.

ツェルを直に攻撃するものと解釈した」と異議を申し立てた。少数派は、「こうした訴訟がこの国の団体に対してなされるかもしれないし、組合員の一人が……争議差止め命令のもつ害悪の犠牲になる時には、忘恩と無関心の罪で告訴される」⁵⁴⁾ ように、NCFを好意的にみるかそうみないかといった行動は賢明でないと当時考えていた。

この大会では賛否両論が何日にもわたって熱心に闘わされ、規約委員会 (Constitutional Committee) だけが組合員に制限を課す権限を有すると主張された。ミッチェルにも自己弁護する機会が与えられるべきだと抗議する者もあり、急進派のリーダーのダンカン・マクドナルド (Duncan McDonald) もその一人だった。彼は、一人のUMW組合員が関係しただけで、AFL幹部の多くもNCFの会員だったので、この問題はAFLが決定すべき問題だと考えた。大会議長ルイスの声明に対して、マクドナルドは問題はミッチェルに留まらず、NCFの問題でもあったと強く主張した⁵⁵⁾。他の人々の要求は、組織労働者の利害と反目するNCFが1つの団体として何をしてきたのか知ることにあつた。ルイスは、NCFはこの国の労働者にその目的が労働協約の推進にあつたと信じさせる意図をもって組織されたし、「NCFは労使間のすべての闘争と厳格に距離をとり、何事かを行うのを拒否し、この国で利害関係のあるストライキの粉碎にそのすべての影響力を行使した」と回答した。ルイスは、USスチール社のゲーリー判事がNCFの会員だったことを自身の論点の証拠として使った。代議員が、NCFの一会員の態度をNCFの方針を暗示するものと解するのを拒否した時、ルイスはNCFは「会員で構成されているのだから、会員の行動によって判断される」⁵⁶⁾ と繰り返すだけだった。

なかには、問題となっている行動はミッチェルに対する個人的陰謀の一部であつたと非難する者もいた。同年末、招集されたAFLの大会で、ミッチェルはUMWのコロンバス大会に出席した代議員のほとんどが不正に提供された信任状を手にしていただけだと宣言した⁵⁷⁾。彼は、同大会で違法な投票があつたという事実を実証する支部組合の宣誓供述書と、複数の組合員の告発を入手したと話すことで、自身の1912年のUMW年次大会での主張を証明しようとした。その場にいた一人の代議員は、コロンバス大会は自分がそれまで参加した大会のなかで、「最も腐敗した」大会だったと語ることでミッチェルを支援した。他の派閥を出し抜こうとする別の派閥の不断の奮闘があつたし、NCFに関する決議は「ルイス一派と社会主義者の足並みを揃えた行動で終始した」。先の代議員はコロンバス大会後に聞いた会話を書き留めていた。そのなかで一人の社会主義者は、ルイス一派がUMWの支配権を掌握するし、同派はUMW内にて社会主義と敵対する何らかの機関に属する者全員を追放すると語り、さらに、労働者はその辛い

54) *Ibid.*

55) グリュックの著書が、その背景とともに、この大会の議事録の比較的完璧な解説を提供してくれている。Gluck, *op. cit.*, pp. 232 ff.

56) MS copy of convention proceedings, G-AFL.

57) *AFL Proc.*, 1911, p. 230.

労働に対する十分な結果を望んだし、UMWは古くさい存在だったから、これを達成する唯一の方法は社会主義によるしかなかったとも語った⁵⁸⁾。

UMWのコロンバス年次大会は、決議委員会の報告書に関して何も決定できなかった。最終的に、規約改正委員会（Committee on Constitutional Changes）が次のような条項が規約に加えられるべきことを提案した。つまり、NCFの会員であった者は誰であってもUMWの組合員資格を失う、と。代議員の点呼に併せてとられた採決は、報告書に賛成が1,213票で反対が967票だった（前は賛成443票、反対378票⁵⁹⁾）。ミッチェルは、この時点で、生計を立てる手段としてUMWかNCFとの関係維持かのどちらかを選択できる機会を少なくとも手にした。

イーズリーとNCF首脳陣は、満足と落胆が緋い交ぜになった感情をもって炭鉱夫の年次大会の進展を見守った。ルイスが委員長選に負けた当初は、先の決議もお蔵入りになるだろうと期待した。炭鉱夫のNCFに関する議論に言及した際に、イーズリーは、「……労資は共通した利害を有していると炭鉱夫を説得することで、UMWの好戦性を打ち破る責任以外にNCFの調停活動の有効性に感謝の意を表するもの」があるのかと問うた。また、カーネギーやベルモント、それ以外のNCFに資金援助した人たちの出費は、微々たる金額で損害とまでは言えないし、出費は随分以前の話なので、NCFの労働者側委員はそれについてまったく頓着していない、とした⁶⁰⁾。

炭鉱夫がどう判断するかまだわからなかったので、ゴンパーズとミッチェルはNCFの何人かの首脳とともに緊急対策会議に出る準備を整えた。イーズリーとベルモントはともに、その会議を当初予定されていたベルモントのオフィスで開くのは賢明でないと考えた。この点をベルモントはこう記している。

私はミッチェルあるいはゴンパーズが誤解されかねない立場に置こうとした最後の一人であった。我々の間で、もしかするとどんな人間でもそうであったように、炭鉱夫は自分たちが責任をもつ利害に忠実で、近づき難いのを知っているし、彼らも私が影響を与えるべく自分たちに近づかないを知っている。我々が意見の相違に拘束されないのと同様、炭鉱夫も拘束されない……⁶¹⁾。

UMW年次大会の決定は4月1日に有効になるはずだった。ミッチェルの親族は、組合を離れ、NCFでの役職を堅持すべしと助言した⁶²⁾。そうすれば、不当行為での有罪判決は、NCFが組織労働者のために成し遂げてきた現実の善の総量に比すれば大したものではなくなる。NCFと関係していた労組幹部は、ミッチェルに方針を変えずにNCFに留まるよう説得した。

58) *UMW Proc.*, 1912, p. 475.

59) Gluck, *op. cit.*, p. 235.

60) R. Easley to S. Low, New York, January 25, 1911, L-COL.

61) A. Belmont to R. Easley, New York, January 26, 1911; and R. Easley to A. Belmont, January 25, 1911, copy, E-NYPL.

62) Gluck, *op. cit.*, p. 236.

その時点では、彼らは社会主義者と最後まで闘うほうがよかった。それと言うのも、社会主義者は労働者側の全代表をNCFから追い出すまで満足しないからである。ゴンパーズの「闘志の血」は滾ったし、社会主義者を労働運動から追い払う好機と捉えた⁶³⁾。

ミッチェルにとって、それは彼が「賞賛すべき有益な存在」と考えた1つの団体との関係を断つか、あるいはその構築に多大なる貢献をし、「ほとんど自身で創り出した落し子のような存在とみるのを学んだ」UMWの組合員を辞めるかという問題であった⁶⁴⁾。UMWは彼に自己防衛の機会を与えることなく打ちのめしたけれど、闘いには勝利しそうだった。そこで彼は自身の全人生を立て直す必要に再度直面した。ミッチェルは、炭鉱夫の大会が2つの団体のどちらかを選ぶよう迫ったというよりは、「社会に向けた数多くの有益な活動に加えて、正当な産業平和の擁護者としての立場を首尾一貫してとったNCFに対する不当で根拠のない攻撃といった」、この大会での炭鉱夫の所業を遺憾に思ったので、NCF会長セス・ロウに正式の辞表を認めた。ミッチェルは前年1月のNCFの年次総会で労働協約部座長に再選されていた。任期満了まで棚上げになっていた炭鉱夫の規約の施行を抑えておく方法がなかったので、座長としての契約から解放し、自身のNCFの執行委員会委員の辞任を受け入れてくれるよう慎んでロウに要請した。ミッチェルは、自身に寄せてもらった信頼と、労働協約を通して産業平和を推進しようとした際に、自身の奮闘がいつも受けた協力に深く感謝する、とロウとNCFの他の役員ならびにその会員に伝えた⁶⁵⁾。

ロウはミッチェルの要請を受け入れたが、契約を3年間更新するとの特別提案がNCF側からあったにもかかわらず辞任したと衆知されるのを望んだ。ロウは、ミッチェルが最後の2年半でNCFのために成し遂げた活動を非常に高く評価した。ミッチェルが使用者と従業員との協調にどれほど貢献したかを完璧に評価できたのは、NCFを実際に運営していた同僚だけであった。ロウは彼に特段の義理を感じた。それと言うのも、ミッチェルはロウが「極めて重要な関心をもつ諸問題に関する労働者の見解を……それまでよりも深く」⁶⁶⁾ 理解するのを助けていたからである。

広く世間に喧伝された手紙で、ゴンパーズはミッチェルの決断を祝している。UMWがとった行動は間違っていただけでなく、UMWや労働運動、さらにはミッチェル自身にとっても理に適っていなかったとゴンパーズは述べている。資本家階級が最も恨みを抱く敵は、ミッチェルがとった行動の結果を大いに慰めとするだろう。「そのような行動は資本家階級の利益はもとより、労働者に対する見せかけの関心と友愛の陰に隠れた不誠実な詐称者の利益にもなる」。ゴンパーズは、NCFに対するいかなる反感も、「老練で党派心の強い社会主義者」に帰因すると断言した。彼にとって、労働組合主義は社会主義者が言うところの哲学とはまったく違うも

63) R. Easley to John Hays Hammond, February 4, 1911, copy, E-NYPL.

64) Mitchell's address before the AFL convention, *AFL Proc.*, 1911, p. 228.

65) J. Mitchell to S. Low, New York, February 15, 1911, E-NYPL.

66) S. Low to J. Mitchell, February 28, 1911, copy, L-COL.

のであった⁶⁷⁾。

ミッチェルの辞任、ゴンパーズの手紙、その後の労働者側会員の大いなる宣伝によるNCFの擁護は、労働者側会員が綿密に計画したプログラムのすべてであった。こうした状況にかかわっていた人々は、崇高なる善行が自分たちの運動全体に寄与すると信じていたし⁶⁸⁾、労働者側会員は社会主義者が投げかけた挑戦の受諾を提案した⁶⁹⁾。

しかしながら、彼ら組合員の最も差し迫った問題は社会主義者への攻撃ではなく、どちらかと言えばNCFの首脳たちを労働者や社会主義者などの酷評に憤慨させないようにするという問題であった。イーズリーは労働協約部の徹底的な再編を推進したがっていた。ミッチェルは、例のボイコット事件での訴訟で同部での仕事を完遂できなかった。イーズリーとミッチェルは、ミッチェルの辞任のせいで同部の活動を中断するのは間違いだと結論づけた。二人は、新聞発行者協会(Newspaper Publishers' Association)を代表するハーマン・リダー(Herman Ridder)〔訳注12〕と国際活版工組合(International Typographical Union)のジェームズ・M・リンチ(James M. Lynch)が労働協約部の副座長に就任すれば、同協会全体がこの国の日刊新聞の有力出版者のほほすべてが属しているNCFと実質上関係することになると考えた⁷⁰⁾。新聞発行者協会と国際活版工組合の間には全国規模の卓越した労働協約を締結していたし、NCFは他の同業組合に目を向けるよりも、こうしたやり方でより多くの世間の注目を集められた。イーズリーは、リンチとリダーがNCFの提案を承諾すれば、労働協約を締結していたこの国の全使用者に手紙を出す計画を練った。これには鉄道労働者、建築業労働者、印刷業労働者、ストーヴ製造業者、劇場管理者、市街鉄道労働者などが含まれた。関係する全同業組合の執行委員会とその重要な地方支部労働者も勧誘できた。「もっとはっきり言えば、団体交渉のために労働協約部をとつともなく強力な部門にできたのである」。会員数が徐々に増えた後、6月あるいは遅くとも秋口には多くが集まる協議会を招集できるまでになった。「労資が一緒になれば労働協約の原則を攻撃するようになる」との理由で、コロンバス大会でNCFを攻撃した人々がいたという事実を考え合わせると、私(イーズリー——注、訳者)はこの点が重要と考えるのだが、NCFは労働協約部門を推進するのにこうした状況を活用すべきである⁷¹⁾。

この間、ロウ会長は翌年の執行委員会の委員構成を徹底的に点検した。同委員会は、NCFを代表する3つの異なるグループそれぞれから16人ずつ、総計48名の委員に執行評議会委員を

67) S. Gompers to J. Mitchell, March 3, 1911, copy, G-AFL.

68) R. Easley to M. Marks, March 1, 1911, copy, E-NYPL.

69) S. Low to S. Gompers, New York, March 3, 1911, G-AFL.

70) R. Easley to S. Low, New York, March 4, 1911, L-COL.

71) R. Easley to S. Gompers, March 6, 1911, copy, E-NYPL.

〔訳注12〕1895-1915。ニューヨーク・シュターツ・ツァイトゥング(New York Staats-Zeitung)の発行者。同紙はドイツ語で発行され、外国語日刊紙で最高部数を当時誇っていた。本文にあるように新聞発行者協会の会長も務めていた。

加えた人々で構成される。通常、執行評議会委員は執行委員会の名簿にも重複登録できたから、一般大衆と使用者の代表者は執行委員の資格だけで18名を充足したことは一度もなかった。ロウとイーズリーは、NCFにとって価値なしと判断した人物を削って、別の区分で新人を加えようとした。執行評議会に名前が挙がっている人物は、執行委員会の名簿に名前が載らない形で定員は確保された。ミッチェルの辞任とその時点でゴンパーズの名前が執行評議会だけに挙がっていたせいで、ゴンパーズは執行委員会に指名できる二人の労働者側委員の名前を挙げるよう要請された⁷²⁾。

ゴンパーズは以上の変更のすべてに反対した。彼は、労働組合が「資本家と政界で力のある社会主義者の容赦ない攻撃からNCFとその政策を守る偉大な闘い」のまっただ中であつたことをロウに思い起こさせ、さらに、NCFの機構に無用の変更を加える妥当性に疑義を呈した。役員であれ会員であれ、人事の修正は敵の圧力のせいで行われたと受け止められる可能性があつた。彼は、執行委員会からミッチェルの名前の削除に代わる選択肢がないのはわかつていたが、この時点で二人の新しい労働者側委員を指名するのは有害以外の何物でもないと考えた⁷³⁾。イーズリーは、優勢になる好機を敵に与えてはならないという点では、二つ返事でゴンパーズに同意した。二人の新人は、執行委員会の使用者側委員と一般大衆側委員を若返えらせるが、「労働者側代表は新しい血を必要としない」⁷⁴⁾。労働協約部とその活動範囲の拡大という点の修正についてはゴンパーズも反対であつた。労働界の情勢と一般労働者の意向と気性を知っていたゴンパーズは、「今後かなりの間労働運動で活躍するであろう人物に、不道德な人々や無分別な人々の攻撃の新たな好機と誤解されかねないことをやらせるのは賢明ではない」と判断した。ミッチェルと、付随的とは言え労働組合運動で活発に活動してきた他の人たち全員に対して行われた不当行為との解釈はすでに明白だった⁷⁵⁾。

ゴンパーズは、物議を醸しているこの問題に関する世論の動向を成り行き任せにしなかつた。彼は、アメリカン・フェデレイション誌の3月号に論文を直ちに執筆した。そのなかで、容赦ない侮蔑のすべてをもって社会主義者に何事かを感じさせようとした。覚醒した時の彼の皮肉は剃刀のように鋭利で、その憤りは杭打機と同じぐらいの重量感があつた。彼は、NCFと「NCF化されたAFL幹部」に関する論説で、社会主義者が使った「根拠のない中傷」を詳細に論じた。彼は、社会主義者がニューヨークで発行していた機関誌のコール (Call) 紙に掲載された記事の以下のような見出しに注目した。つまり、「皆がNCFに救われた」、「狼と子羊が一緒に眠る」、「何たる喜び！労働者夜会服を着る」、「アンドリュー・カーネギーとセオドア・ローズヴェルトが高貴な労働者を冷やかす」、「誤解された知性」や「誠実と正直さの放棄」を

72) S. Low to S. Gompers, New York, March 3, 1911; and R. Easley to S. Gompers, New York, March 7, 1911, G-AFL.

73) S. Gompers to S. Low, March 4, 1911, copy, G-AFL.

74) R. Easley to S. Gompers, New York, March 7, 1911, G-AFL.

75) S. Gompers to S. Low, Washington, March 9, 1911, E-NYPL.

露呈したこれら論考の言説は、「不誠実で、最もさもしい感情を掻き立てるようもくろまれていた」。ゴンパーズは、反労組を標榜する使用者と社会主義者の攻撃との類似性を指摘した。次に彼は、創設後10年間のNCFの業績を要約する仕事に取り掛かった。直近のNCFの会合で特段の配慮が払われたのは、株式会社の規制、労使関係上の斡旋と仲裁、労働者災害補償といった問題であった。この国の全国規模のボランティア機関で、労働者災害補償という最も難しく複雑な問題を検討していたものはなかった。災害補償に敵対する陣営が、それが労働者に最高の結果をもたらすのが明確になった段階で議論の論点を変えようとしていた当時において、労働者階級の利益に直接資するこの問題を安心して任せられる人物はミッチェル以外にはいなかった。社会主義者は株式会社規制の問題の進展にどう貢献したのか。NCFはこの問題に関する世論のあらゆる面を代表する人物を集めた。ゴンパーズは、誰でもいいから産業平和に向けたNCFのプログラムのどこが労働組合主義の主義主張の反感を買ったのか指摘してくれるよう煽った。

失われてはならない1つの段階に到達した。すなわち、この国を代表する巨大使用者が顔を合わせ、その会合で、労使の対立を避けるために労働者と協議するのは全使用者の義務で、対立が生じてしまった時には産業平和を取り戻すべく協議会を開催しなければならないと宣言したのである。それどころか、これは適正な賃金、労働時間、労働条件とは何かを決定する唯一の権限を使用者自身がもはやもっていないとみているとの宣言だったし、労働者は自分たちが働く労働条件の最終決定に連帯して発言する権利を有しているとの宣言であった。

AFLは「こういうものとして」NCFに加盟していなかったし、それゆえ、組織労働者は特定の行動に身を委ねたわけではない。労組幹部は、自分たちの運動の効率性あるいは闘争性を損なわないで実利を手にする好機を利用しただけだった。NCFは多くの提言に対する見解を表明する計り知れない機会を提供した。労働者が使用者と会合するなどめったにできなかった。NCFは、「……組織労働者の声に喜んで耳を傾けると公言する使用者の大きなグループ」を一カ所に集める際の仲介役を演じた。NCFにはNCFなりの活動領域があった。それは特殊な領域で、NCFの社会的包括性あるいはその重要性は誇張されてはならない。しかし、少なくともNCFはこの国の資本家が自分たちの「公平な接し方 (square dealing) との宣言が空約束でないことと、NCF内の著名人の多くが公平な接し方が命じるところに従う」のを示す機会を提供した。NCFは、労働者が直面する最も差し迫った問題のいくつかを把握し、研究と協議を通して一定の結論に導こうとした。NCFは「自分たちで決めた課題」を忠実に履行し、労働者では指揮できなかった一団の法的・専門的な才能を有する人間に寄付してきたし、労働者側会員はあらゆる点で自分たちの利害を守る活動の全局面にかかわった⁷⁶⁾。

他の労働者向けの定期刊行物は、おそらくゴンパーズあるいは彼以外のAFL幹部に迫られ

76) S. Gompers, "Organized Labor and the National Civic Federation," *loc. cit.*, 181ff.

てNCFとの闘いを取り上げた。NCFの執行委員会の一員になって間もない国際トラック運転手友愛会 (International Brotherhood of Teamsters) のダニエル・J・トビン (Daniel J. Tobin) が、同友愛会の公式雑誌の論説でNCFを擁護した。炭鉱夫内の意見の対立に関するコメントはなかったが、NCFのような団体は、他のいかなる団体ができたよりも大きな善行をしたと断言した。意外なことに彼はこうも主張した。NCFは、その影響力と会員を通して、「組織労働者に手を貸すべく常に秘密裏に活動してきたし、現在もそうである。NCFは、見返りを求めることなく、何ものにも煩わされることなく、また誇示することなくその活動を行っているし、この種の団体がNCFが過去数年間活動してきた線に沿って活動を継続した時には、悲惨なストライキに頼らずに獲得したより良好な労働条件といった大きな成果が彼方にみえる」と。トビンは、ミッチェルの尽力でNCFから支援を受けたという複数の経験を物語った。ミッチェルが労働協約部の座長として行ったことは労働運動にとって貴重なものであった。ニューヨークとその周辺で争議に関係したほぼすべての団体に惜しまず奉仕したし、彼の影響力がなければ適わなかった多くの合意もあった。炭鉱夫の年次大会での行動は体面を汚すものだったし、労働運動にかかわっていた聡明な人間は、ミッチェルほどの頭脳と理解力を兼ね備えた人物がほとんど判断力を失っているのに驚いた。ミッチェルは、自身の立場あるいは俸給よりも、自身の組合に思いを馳せていたのを再度証明した。世界にはこの種の人間はほとんどいなかったし、「言葉のすべての意味で潔白で、高潔で」器量に優れた人物が絶えず敵から非難されたのは不思議なことであった⁷⁷⁾。

UMWの「とてつもない間違い」に関するコメントがはるかカナダから届いた。UMW年次大会での所業は社会主義者への対抗のみならず、信頼と名誉ある地位を独占してきた人物への妬みと嫉妬の産物とみなされた。ミッチェルはUMWの決定に従ったが、セス・ロウへの手紙で「堂々と真摯に」抗議した⁷⁸⁾。かくして、その仕事に最適の人物であったミッチェルを不当に侮辱した結果、UMWは「世間の評価を低め、敵対者の批判のいくつかを正当化してしまい、組織労働者の大義を傷つけるかもしれない間違いを犯して」⁷⁹⁾いた。労働者が書いた別の論文は、辞任を強要した仲間の「些細な恨み」を非難すると同時に、ミッチェルに称賛の意を表した⁸⁰⁾。アメリカン・フェデレイション誌は労働界に、「ジョン・ミッチェルの忠誠心」を再度思い起こさせ、UMWの所業を「大多数の願望の酷い虚言……」⁸¹⁾と描写した。

ミッチェル自身は同年春のUMW機関誌に掲載した一連の論考でNCFを擁護した。彼が語った話の筋は、「そうしたいと思ったほど強くはなかったが、とてもじゃないが言えないことが

77) D. J. Tobin, *Official Magazine of the International Brotherhood of Teamsters* (March, 1911), 8-9. L-COLからの抜粋。

78) ミッチェルの辞職の辞はAFLによって広範に発表された。

79) "Humiliating Their Leader," *Hamilton Herald*, Ontario, March 11, 1911, MS copy in G-AFL.

80) J. L. Rodier, *Washington Trades Unionist*. これは "The Loyalty of John Mitchell," *American Federationist*, XVIII (April, 1911), 308-309. に引用されている。

81) *Ibid.*, 307.

何点かある——UMW組合員が恩知らずにみえるのを指摘すれば自分が傷つく。しかしながら、UMW組合員がこの論考を読んだ時には、感情の激変が……明確になると思う」というものであった⁸²⁾。彼は労働運動に「麻酔をかけて催眠状態にする」との愚かな告発を分析し、NCFにその責めを負わせた。それは、労働者の闘いを主導し、労働運動から文句の付けようのない敬意を払われた、長年にわたって国際組合の最高指導者であった人物に向けられた。何ら特別なことがNCFになされていなかったのに、こうした漠然とした攻撃をしなければならなかったのである。次にミッチェルはNCFの組織全体を記述する。まずはその開かれた会員資格について、次に公共活動に適した領域で会員に実践的な仕事をする機会を提供した諸部門についてそれぞれ記述している。彼は、NCFが非常に裕福な人々に支配されてきたわけではなく、寄付はまったくもって自発的なもので、そのほとんどは会員に割り振られたので、合法的な活動をNCFが続けるのに必要な資金量を確保するのが難しかった事実を強調した。その名前が社会主義者の酷評で挙がる人物の多くはNCFの会員ではなかった。ミッチェルは、労働協約の作成ではなく、その推進に当たった自身の部門の活動を詳述した。その職責は関連情報を流布し、協約作成の要請を受けた際の支援にあった。この目的に向けて、NCFの事務局には労働協約に関する大量の情報——「AFLの事務局やいくつかの大学の経済学部にあったコレクションに次ぐ規模の」——が集められた。こうした情報センターの価値は、炭鉱業における団体交渉の発展に思いを馳せるUMW組合員から正当に評価されるだろう。12年前の労働協約は現在交渉下にある綿密で明確なものと比較して、単純かつ曖昧なものであった。労働協約の作成は何年もの経験を要する難しくデリケートな作業であった。ミッチェルがNCFと関係していた折りには、複数の組合の代表あるいは使用者がオフィスに來たり、あるいは何件かの係争中の問題に関する会議の準備でNCFの尽力を要請する手紙を書かずに一週間を過ごした時期はなかった。重要なのは、こうした申請の90%が組合代表者によるものであったという事実だった。最後にミッチェルは、自身がNCFの役員だけでなく、UMWの委員長であったまさにその時期——NCFが麻酔をかけて催眠状態にする効果を行っていたと思われた何年間——にUMWが成長していた点を指摘した。ミッチェルは、UMW組合員がNCF会員だった自分と敵対したわけではないと信じることで、自身を正当化しているのを自覚していた。それと言うのも、委員長退任以降も自身がNCF会員だったことを十分承知の上で、UMW組合員はAFL大会の代議員選挙で他の候補者よりも多くの票を自分に投じたし、昨年12月の彼の得票数はほかの誰よりも多かったからである⁸³⁾。

イーズリーは労働組合運動の枠内で労組幹部が継続していたプロパガンダ・キャンペーンには貢献できなかったが、社会主義者との議論にかけては老練者であった。彼は社会主義者全体のなかで最も有能な知性派の「右派」弁護士、モリス・ヒルキットをやり込めようとした。

82) J. Mitchell to S. Gompers, New York, March 29, 1911, G-AFL.

83) この論考のコピーは以下に散見される。Mitchell's papers, dated April 26, May 6, and May 9, M-CUA.

1911年5月、ヒルキットにNCFの活動の鳥観図が載ったパンフレットを送ったイーズリーは、彼が「公正な人間として」、NCFの敵対者の論拠が不確かな主張よりも、NCFを理性的に理解した上で批判したがつているのを知った⁸⁴⁾。

ヒルキットが返事を返したのは6月であった。彼が組織労働者に対するNCFの姿勢に賛同することはもちろんなかったが、強い関心は寄せていた。彼が主張するように、NCFと社会主義者の双方とも労資の闘いに起源があったが、主義主張や達成方法で完全に対立していて、そこに類似点は見出せなかった。社会主義者は、闘争は現状の産業組織に固有のものと考えていた。使用者は常に最少の支払いで最大の労働を確保しようと躍起になり、一方労働者は当然その労働力を最大可能な価格で売ろうと必死になる。これは死闘であったし、「相争っている双方の一方が最終的に勝つ闘いであった。資本家の最終勝利は全人類の隷属化と国家の退廃を意味するし、労働者の勝利は社会の調和と進歩を意味するだろう」。社会主義者は、産業的にも政治意識としても自立した階級意識をもつ集団に組織することで、労働者の闘争力を強化しようとした。一方、ヒルキットはNCFが労使の闘争を悲しむべき誤解の結果とみた点は理解した。NCFの社会に対する考えは、労資の「偽りの利害の調和」に基づいていたし、その政策は労資両階級の和解であったし、労資の意見の相違を調整し、労資の闘争の取り繕うものであった。これは、NCFの諸部門の活動と労資の打ち解けた晩餐会によって達成されるはずだった。

NCFが主役を演じたゲームは、いかなる国の使用者も未だかつて考案したことのない狡猾なものである。このゲームは資本家からは何も取り上げないし、労働者には何も与えないし、限りない寛容の心といった外観をもって行われるので、実際のところ、労働運動の真っ正直な外交官は圧倒されてしまう。

ヒルキットはNCFの労働者災害補償に対する立ち位置に注目した。この国の労働者が洗練さを欠く法体系に反発する気運を示し始めて以降、彼らの法改正に向けた運動が社会主義者の路線に沿った強力な政治志向の強い労働運動を興隆させる危険があった。この不吉な可能性の機先を制するために、用心深いNCFは、労働者には補償するが使用者には痛みを感じさせない災害補償法を起草し、「労働者の運動を同法が創り出した浅薄な方向に逸らす方法を現在模索している」。NCFのこれ以外の全改革と同様、災害補償法は差し迫る労働者の反発の回避だけを目的とした、「安っぽくて、取るに足りない」ものであった。

組織労働者の運動に対して、NCFの政策はほとんど知らぬ間に効いてきて、一見無害だが実は有害な毒薬である。それは組織労働者の運動から自立心、生气、好戦的な熱狂を奪うし、その幹部を催眠状態にするか墮落させ、その平組員を無力にし、闘争心を萎えさせる。社会党は、できる限りの努力を尽くしてこの国の労働者をNCFの慈悲深い影響から守ろうとしているので、両団体間にはほとん

84) R. Easley to M. Hillquit, New York, May 19, 1911, copy, G-AFL.

ど愛情はない⁸⁵⁾。

イーズリーは、両団体間にある敵意の核心を真っ向両断し、こうした鋭い批評に時間を掛けて回答した。自身が大きな闘いに直面しているのを知っていたが、誰かが「……社会主義者の攻撃から自分たちを守る際に使える材料を提供するのをNCFの労働者側会員に負わせる」⁸⁶⁾と考えた彼は、回答を起草する際にゴンパーズやミッチェル、それにロウの意見を真剣に聞いた⁸⁷⁾。結果は、反労組を標榜する使用者から、NCFの多くの敵対者から、ヒルキット自身から、さらにNCF会員からの引合いが多数あった途方もない「イーズリーの叙事詩 (Easley epic)」であった。「安っぽくて、取るに足りない」ものであったかどうか、あるいは労働運動の支持を得るに値する改革であったかどうか、を確認する分析をイーズリーがやらなければならなかったNCFの十年に及ぶ活動には、以下のような多様なものがあった。つまり、労働者災害補償、児童労働・女性のためのより短い就労時間・事故防止・工場立入検査といった問題に影響を与える統一州法、使用者の福利厚生、産業経済の議論を通じた啓蒙活動、団体交渉である。おそらく、ヒルキットは結果としてこれらの改革をもたらしたNCFのやり方を評価しなかった。社会主義者の救済策は、すべての生産手段、流通手段、そして土地の政府による共同所有と共同運用であったし、改革は、社会主義者がすべてを撰取するまで待たなくてはならないものだった。社会主義文献を読んだイーズリーはこれら改革が何世代も先送りされるに違いないと推測した。それでもここ10年間に進歩はあったし、あらゆることがこの先10年間に進歩を遂げるのを示唆していた。イーズリーはすべてが破壊され、もう一度やり直さなければならないのではと考えた。

イーズリーは、労働者が生気を抜かれていたとの告発を証明する、NCFの会合での労組幹部の発言を指摘するようヒルキットに求めた。議論はNCF内では自由に行われ、満場一致で合意されるか、それが無理だと判断された審議中の問題は取り下げられた。NCFが堅実な活動領域を提供した時にだけ望ましい結果がもたらされたし、全員がその重大さで合意できる改革要請が多数寄せられた。ヒルキットの言う搾取者と被搾取者との利害の偽りの調和はなかったし、NCFの会員は労資間には和解できない対立はなく、「我々は労使の利害が常に同じであるとは強く主張しないが、一般的には、ある特定の時点で労使は和解できると信じている」⁸⁸⁾。

社会主義者たちもヒルキットとイーズリーとの往復書簡を考量した。社会党全国書記局のプ

85) M. Hillquit to R. Easley, New York, June 16, 1911, E-NYPL. 1911年6月16日と7月21日にそれぞれ交わされたヒルキットとイーズリー間の2通の手紙は次のパンフレットに全文が掲載されている。*Socialism and the National Civic Federation* (ca. 1911).

86) R. Easley to S. Low, August 19, 1911, copy, E-NYPL.

87) Easley to S. Gompers, New York, June 22, 1911, G-AFL; and to S. Low, August 19, 1911, copy, E-NYPL.

88) R. Easley to M. Hillquit, New York, July 21, 1911. 以下に引用されている。*Socialism and the National Civic Federation, op. cit.*

レス・リリースは、論点を説明し、公平に問題を直視した上で、二人の書簡が「組織労働者とこの国の労働者階級の重大関心事」であった問題を取り上げたという事実に注意を喚起した。ヒルキットが労働者階級の熱心な支持者であったから、彼の書簡は労働界で広範な議論を巻き起こし、それはあらゆる見地からみて望ましいことであった⁸⁹⁾。

こうした議論は、イーズリーの立場からしても確かに望ましかったし、NCFの労働者側会員にとってもそうであった。春から夏にかけて、彼らは多忙を極めた。社会主義者とAFL、ならびにNCFとの三方面での闘いのほかに、労働者の様々な会議で広く議題に挙げた問題はなかった。3月初旬には早くも、その組合員がコロンバス年次大会の所業に抗議したUMWのこの国全体のローカル組合からミッチェルは喜ばしい情報を受けた。7万人の組合員を擁するイリノイ州にあった最大の地方支部が年次大会の所業を弾劾し、それに反対したのはわずか11票であった⁹⁰⁾。イリノイ州労働総同盟 (Illinois State Federation of Labor) はゴンパーズのAFL退任を要求する決議を却下した⁹¹⁾。ティマシィ・ヒーリー (Timothy Healy) は火夫友愛会の年次大会で「社会主義者を除名」し、ガラス吹き工組合 (Glass Blowers) のデニス・ヘイズ (Denis Hayes) は組合大会で「4対1」をもって「社会主義者を一掃した」⁹²⁾。

これらすべてが必ずしもNCF=AFL連合体 (NCF-AFL forces) の勝利ではなかった⁹³⁾。AFLのファイルには、NCFと関係した組合員は誰でもAFLあるいは所属組合を辞める、あるいはAFL大会がゴンパーズ会長にAFLかNCFのどちらかからの退任を指示する決議を通すよう要求するローカル組合あるいは国際組合が通した多くの決議のコピーがある。さらに、これら決議と、ゴンパーズがNCFを擁護し、UMW大会での所業に責任があるとして社会主義者あるいは世界産業別労働組合の分子を批判する上記組合の幹部に宛てたゴンパーズの手紙に関する辛辣な論争のコピーもある。NCFを巡る賛否両論は一定のカテゴリーに分類される。通常、批難は2つの点に対して行われた。つまり、NCFが階級闘争のもつ性格を理解しおらず、労資間の利害の調和という概念を推進し損ねたと言って非難されるか、あるいはNCFの使用者側会員が労働者の敵として選ばれていたとの批難である。「争議差し止め命令法案」タフト、ジョン・ヘイズ・ハモンド (John Hays Hammond) [訳注13] (「米国のセシル・ローズ (Cecil

89) J. M. Barnes, "To the Socialist and Labor Press," Chicago, July 1, 1911, E-NYPL.

90) J. Mitchell to S. Gompers, New York, March 7, 1911, G-AFL.

91) MS copy, G-AFL.

92) R. Easley to A. Belmont, August 25, 1911, copy, E-NYPL.

93) UMW年次大会での勝利に加えて、社会主義者は組織労働者の保守的な指導体制に深い痛手を二度にわたって負わせた。NCFの会員であったジェームズ・オCONNELL (James O'Connell) は、国際機械工組合 (International Association of Machinists) 委員長の地位を社会主義者のウィリアム・H・ジョンストン (William H. Johnston) に奪われ、AFLの会計担当でNCF会員のジェームズ・レノン (James Lennon) は仕立工組合 (Tailors' Union) の書記の地位を失った。"Socialism in the Trade Unions," *America*, V (September 16, 1911), 542.

[訳注13] 1855-1936。アメリカの鉱山技師。訳注14のセシル・ローズの協力者。

Rhodes)」（訳注14）、「その奴隷がデュボン製火薬を造る」デュボン、（ホームステッドで名を馳せた）アンドリュー・カーネギー。ここに名前を挙げた使用者は、NCFに属していなかったとしても、善良な組合員の心の底から来る反発を買った。一方、NCFには直接防御する手段はなかった。組合員は、使用者に影響を与えた団体に自分たちが打ち込んだ「両刃の楔」を抜こうとするのは軽率だと言われた。有能な労働者側会員には、NCF内に組織労働者にとって有益な何かを創り出す機会が与えられるべきである。ミッチェルは労働運動を裏切ったとの告発から何度も守られた。

1つの興味深い文書が、社会主義者とNCFとの闘いが国際労働運動の会議に波紋を投げかけたことを示唆している。ニューヨークのイタリア系社会主義新聞、イル・プロレタリアーオ (*Il Proletario*) の1911年7月28日号は、ブダペストの国際会議に代表者を派遣予定であったイタリア系組合になされた警告を載せていた。同組合は1909年にパリで開催された直近の国際会議で、AFL会長ではあるが「北米の最も影響力のある資本家が属している」NCFの副会長でもあったゴンパーズでは米国の労働運動は公正に代表されないと警告されたのである。ゴンパーズは労働者の代表ではなく、彼同様NCFのプログラムと政策に忠誠を誓ったAFL執行部の幹部11人から指名された。この1909年の国際会議にIWWの総執行委員会が手紙を出していた。IWWは自身の代理人を派遣する資金に事欠いたが、「労働者のこの隠れた敵について」国際会議に警告する義務があると考えた。しかし、国際会議の総書記はIWWからの書簡を公表せず、代議員に「ゴンパーズの顔の傷跡」を見る機会を享受させなかった。「ヨーロッパの急進左派政治家 (red politicians)」を代表するこの総書記と「この国の卑劣な組合主義 (yellow unionism) の代弁者」ゴンパーズとの共謀は、労働者に対する愚弄であった。すでに手遅れだったが、この書簡のコピーはイタリアの労働者に送られた。彼らは「米国の代議員」W・Z・フォスター (W. Z. Foster) (訳注15) を支援すべくブダペストに赴く予定の代理人に、AFLとNCFの代理人ジェームズ・ダンカン (訳注16) の入場資格に異議申し立てするよう指図しなければならなかった⁹⁴⁾。

NCFを巡る闘いは、この国の労働運動における保守派と急進派の全面闘争の様相を呈するものになった。この闘いは、ゴンパーズのリーダーシップと社会主義者とその影響力と指導体制に

94) MS copy, G-AFL. IWWがその行動を糾弾したにもかかわらずダンカンは大会で承認された。 *infra*, p. 344.

〔訳注14〕 1853～1902。アフリカにあったイギリスのケープ植民地 (Cape Colony) の政治家で資本家。1890～96年には同植民地の首相を務めた。

〔訳注15〕 1881～1961。1945～57年にアメリカ共産党の総書記を務めた最高指導者の一人。アメリカ社会党 (Socialist Party of America, 1901年入党) やIWW (1909年加入) の党員・組合員であった。1919年に36万5,000人が3ヶ月にわたって闘った鉄鋼ストライキを指導した。その主著は、*History of the Communist Party of the United States* (New York, International Publishers, 1952) であり、同著は『アメリカ合衆国共産党史 (上・下)』(大月書店, 1954年) として邦訳されている。

〔訳注16〕 既出のように、ダンカンはAFLの第一副会長であった。

全面的に反抗したAFLを支配する労働者の小グループとに全焦点を合わせた。終局は1911年11月のAFL年次大会で訪れた。ゴンパーズは現実主義者だったから、その戦略は長期にわたり、何事も成り行き任せにしなかったが、政治宣伝は十分ではなかった。個別組合にはNCFとの体験がある人物、あるいは説得力をもってNCFを守れる人物は誰一人いなかった。こうした理由から、プロパガンダでは社会主義者が勝利した。この国中の個別組合で続く闘いはないほうが良かった。ゴンパーズと彼以外のAFL首脳は問題にはっきりと決着をつけようとした。秋にアトランタで開催された年次大会で話をするのは「大物」であった。「彼らは全国に点在する2万5,000のローカル組合の1つひとつに最終的に届くであろう事実を提示できた」のである⁹⁵⁾。

議論の準備は整った。5月初旬、ゴンパーズとミッチェル、それにイーズリーはキャンペーン計画を慎重に検討した。NCFに対する2つの主な攻撃は、ホームステッド・ストライキに対するカーネギーの責任と、オーガスト・ベルモントのインターボロー社でのストライキを巡ってなされたから、イーズリーは労働者側会員が活用できるこれらの問題に関する全資料の収集を委嘱された。

カーネギーに宛てたイーズリーの手紙はこれら物議を醸す問題でのゴンパーズとミッチェルの態度に多くの光を当てた興味深い文書である。インターボロー社でのストライキに関して、関係する全組合がベルモントに罪はないと宣言したとイーズリーは述べている。組合員は「大胆にもストライキに打って出て、ベルモント氏は裏切ったし、氏は仲裁を申し入れたものの、ローカル組合が全国組合の幹部の権限に反抗し、協約を無視してストライキに入ったと語った」〔訳注17〕。ホームステッドの件については、ゴンパーズとミッチェルはともにカーネギーの立

95) R. Easley to A. Carnegie, November 11, 1911, copy, E-NYPL.

〔訳注17〕 この引用の内容をもう少し解説するとこうである。インターボロー社の従業員の管轄権を巡って、本文で「関係していた全組合」とされている、機関士友愛会、火夫友愛会、アメリカ合同市街鉄道従業員組合が争っていた。前二者は高架鉄道の従業員を組織していた。同社は、ニューヨークの地下鉄を開業した時、地下鉄従業員は高架鉄道従業員よりも長時間かつ低賃金で働くことになると発表した。これに対し、3組合は圧倒的多数をもってストライキに賛成票を投じたが、ベルモントの1日10時間労働で3ドル、1年後に3.50ドルに引き上げるとの提案を受け入れ、1904年9月より効力をもつ協約を締結した。ベルモントのこの譲歩は、大統領選が終わるまでの休戦協定で短命であった。選挙後は、本文で「ベルモント氏は裏切った」とあるように、スト破りの導入準備や従業員の解雇、休憩時間の短縮など協約違反が横行した。このなかで、アメリカ合同市街鉄道従業員組合は組織化キャンペーンを再開し、80%の従業員を組織した。同組合は、本文に「ローカル組合が全国組合の幹部の権限に反抗」とあるように、ローカルがストライキに入る前に争点を本部に付託することを規約で要求していた。1905年3月7日、3組合は10%の賃上げなどを求めてストライキに入った。組合側は仲裁を受け入れる準備が整っていることを示唆したが、インターボロー社は1904年協約を勝手に破ってストに入った（本文では「協約を無視してストライキに入った」の部分）と組合を批難した。このストライキは、スト破りの導入で4日目に粉碎された。その背後には、3組合の幹部がNCFの影響下で同社側に立って行動したことがあった（詳しくは、伊藤健市「IRTストライキと全国市民連盟」『関西大学商学論集』（第62巻第3号、2017年12月）を参照のこと）。

場を強く擁護した。カーネギー（ストライキ時にはヨーロッパに滞在中）がスト参加者とストの最中に喜んで話し合おうとしたとの有力な証拠があった。こうした事実は、（事件全体の真の責任を負っていた）「フリック同志」〔訳注18〕をほとんど批難しなかったが、それが本当であったとしても誰も気に止めないだろう。イーズリーはカーネギーに、ストライキが指示される前の自身の立場に関して、提供できる資料があればそれを渡すよう要請した。イーズリーはこうも付け加えている。

ゴンパーズとミッチェル、それに私もこの資料がほしいのです。それと言うのも、私たちは嘘をついている社会主義者にその前言を取り消させようと思っているからです。彼らは真相など一向に頓着していません。ゴンパーズとミッチェルとともに、個人的にはあなたの熱烈な崇拝者——これは二人があなたのことをよく知っていることからそうなったのですが——であるという事実は別として、たとえ二人があなたのことを嫌っていたとしても、NCF内で自分の身を守ろうとする際にはあなたを守らなければならないのです。2つの問題は関連しています。しかし、あなたを守ることは二人にとっては、当然ですが、はるかに簡単です。それと言うのも、二人はあなたを嫌っているのではなく、あなたのことを崇拝し、敬愛しているからです⁹⁶⁾。

合同市街鉄道従業員組合委員長のW・D・マホーン（Mahon）が、ベルモントの公正さとローカル組合の幹部がこの争議全体に責任があったという事実を強調することで、インターボロー社でのストライキ問題の弁護を主導してこの件は決着をみた。ミッチェルはホームステッドの件で先頭に立つつもりでその準備を整え、議論を始めたが、ゴンパーズは二人を背後から支援するつもりだった⁹⁷⁾。

イーズリーとヒルキットの往復書簡が載っているパンフレットが、来たるべき大論戦の備えとして労組幹部によってこの国中で活用されただけでなく、NCFの問題がAFLのアトランタ年次大会で取り上げられたその当日に、ホール全体で500部が配布された⁹⁸⁾。

96) *Ibid.*, May 20, 1911, E-NYPL. イーズリーがここで最後に語った内容に嘘がないと信じるのは難しい。だが、感情の表出で涙もろくなった時はあった。

97) *Ibid.*, November 11, 1911, copy, E-NYPL.

98) R. Easley to N. M. Butler, January 8, 1912, copy, E-NYPL.

〔訳注18〕 1849-1919。カーネギー製鋼会社（Carnegie Steel Company）の社長、ヘンリー・クレイ・フリック（Henry Clay Frick）のこと。同社ホームステッド工場の従業員は、合同鉄鋼・鈴労働組合に組織され（1892年当時、3,800人中750人程度）、1889年には、会社側の25%の賃下げと団体交渉廃止という提案に対しストライキに入った。スト破りを導入しようと画策するも敗れた会社側は、1892年までの3年契約を合同組合と締結した。だが、同年1月、会社側は新しい賃金率——合同組合の組合員の賃金を18%引き下げる——を提案した。フリックは、来たるべきストライキに備えるため、工場の周りに高さ12フィート、全長3マイルに及ぶ25フィート毎に銃眼のある防壁を造り、ピンカートン探偵社に護衛を要請した。1892年7月5日夜、スト中の従業員40人が撃たれ、9名が死亡した。（以上は、Jeremy Brecher, *Strike! Revised and Updated Edition*, South End Press, 1997, pp.69-75. 戸塚秀夫・櫻井弘子訳『ストライキ!』晶文社、1980年、76～81ページ）を参照した。ちなみに、この邦訳は原著の初版（1972年刊行）の訳である。）

大会7日目の11月20日に論戦に入った、その時点でNCFがらみで3件の決議が提出された。それらを急進派の西部鉱夫連盟、特にコロラドとユタにあった2ないしは3つの州連合組合が採択し、社会主義系の機械工組合(Machinists' Association)もそれを支持した⁹⁹⁾。第10決議は、実際のところ、NCFは自分たちが置かれている本当の状況について労働者を盲目にする目的で存在したと明言した。NCFは、その年次総会でNCFや組織労働者の利害に敵対する類似団体すべてを非難するよう求められる市民連合や商業会議所と対比された。第18決議は、労使間で増大しつつある対立を強調した。NCFは労使間の利害の一致という虚偽の主張に基づいて創設されたが、全組織労働者がNCFを信用しようとしないう傾向が増えているので、同決議はAFLの全幹部と組合員はNCFとの関係を断つよう要請した。第126決議は、労組幹部であれ組合員であれ、NCF会員になるのは「無条件で不承認」と明言した¹⁰⁰⁾。

決議委員会(Committee on Resolutions)はこの件に関して集めた情報について報告した。創設時点でNCFは、「使用者と組織労働者との雇用条件を含む正式協約の締結を支持し、使用者による労働組合承認に対してもそれを裁可すると署名捺印した」。決議委員会は、NCFがこの当初の方針から逸脱したことを示唆するものは何も発見できなかった。むしろ、NCFは、その活動が労使間で生じた問題の平和的調整の支持に賛同する方向に影響力を行使する部門の創設によって、その当初のプログラムを拡充していた。NCFの活動が組織労働者に非友好的であったとか、有害だったことは一度もなかった。NCFに対する批判は、NCFそのものというよりもその会員であった特定の使用者に向けられた。このような団体に労働問題について限定された視点しか持ち合わせていない人物がいるのは当然で、それはいかなる市民団体であれ起こることだった。NCFと関係していた労働組合主義者は完全に信頼に値した。それと言うのも、彼らはAFL内の最も信頼できる有能な幹部であり顧問だったからである。労資の利害に関するNCFの姿勢と公式表明については、それが同一であったと主張するのではなく、むしろNCFは労働組合の主要目的が団結した行動を通じた生産のより大きな分け前の確保にあるとの信条に傾いた¹⁰¹⁾。

決議に非同意を勧告した決議委員会報告書の結果生じた論争は、「大会の記録に残る最も基本的で、最も活発なもの1つ」¹⁰²⁾であった。代議員が次々に立ち上がった。NCFを批判する各人のスピーチに続いたのは、AFL系国際組合の幹部の一人が行った反駁であった。

反論は、何カ月もの論争にもかかわらず、実質的に変わっていなかった。UMW大会でミッチェルをトム・ルイスから擁護した代議員ダンカン・マクドナルドは、NCFへの敵意にかけては明らかに嘘偽りはなかった。炭鉱夫の年次大会に提出された非常に激烈な決議の前に立ちのびたのは、少なくともミッチェルへの個人攻撃でない別の決議を代わりに取り上げたのはこ

99) R. Easley to A. Carnegie, November 11, 1911, copy, E-NYPL.

100) *AFL Proc.*, 1911, pp. 217-218.

101) *Ibid.*, pp. 218 ff.

102) Gompers, *Seventy Years, op. cit.*, I, 400. 前掲邦訳書、上巻、390ページ。

のマクドナルドであった。彼は、投票で決着を付けるのはAFL全体の問題であったので、アトランタ大会のミッチェルを含む全UMW代議員はNCFを糾弾する決議に賛成票を投じるよう指示されたと強く主張した。

反論は、NCFの多くの会員が組織労働者との交渉に反対した、あるいは意図的に組織労働者を粉砕しようとした使用者であったという事実集中した。マクドナルドはUSスチール社がとった残忍な方法を述べ、カーネギーを組織労働者の最悪の敵の一人と断定した。カーネギーは、NCFの労働者側会員が1つの良き目的をもってそこにいるのを認めるに吝かではなかったが、自身に関する限り、別人が代理を務めるのを許さなかったし、「別人がその衣類の裾 (skirts) がきれいなことを示せるまで〔訳注19〕、いわゆる社会事業 (uplift work) に同志を参加させ」ようとはしなかった¹⁰³⁾。UMWの代議員トム・ルイスは、大会出席者に自分たちは社会主義者の提言を討議していなかったという事実を印象づけようとした。それは、社会主義ではなく、労働組合主義の問題であった。彼はAFL幹部が、NCF——平組会員はその会合に出席を許されていないことからわかるように、名前の後に役職上の肩書きが付かない人物は歓迎しない——の会員として留まったことに反対した。他の人々は、決議がミッチェルへの個人的な反感の表現であった点を否定した。別の見方をすれば、彼らは「麻醉をかけて催眠状態にする装置」としてのNCFに単に反対しただけであった。

とりわけ辛辣で、階級意識の濃い議論は代議員のマクス・ヘイズが展開した。彼は、社会主義的な決議案を提出し、AFLの大会でそうした案の擁護に熟達した社会主義系労働組合主義者の最もよく知られた一人であった。ヘイズはゴンパーズとミッチェルに深い尊敬の念をもっており、二人の性格を論じようとは思っていなかったが、多くの論争を聞いた後で、NCFが経済的愚行の産物だったとこれまでも増して確信するようになった。NCFが労働者にとって有益かどうかの問題であった。彼は、産業界の巨頭がトラストへの敵意が増大しているのを知り、世間の注意を逸らすために何かしなくてはならないと決断してNCFを創設したと論じた。労働者との将来の争議を防ぐために、彼ら実力者は「労働者の要求に譲歩しようとする観点からする明確な目的をもって」NCFを創設した。ヘイズはモルガンのような人間が労働者から強奪した莫大な富を詳説し、この種の人間にとって、赤貧状態にあるこの国の労働者に麻醉をかけて催眠状態にするために結成された組織の経費を負担する目的で、気前良く「醸金」することだけが理に適っていた¹⁰⁴⁾。

NCFを強く攻撃したのはわずか4人の代議員だけだった。この点は、炭鉱夫の年次大会でトム・ルイスが用いた戦術に対して、UMW代表団の多くの代議員が辛酸を嘗めたという事実

103) *AFL Proc.*, 1911, pp. 221-222.

104) *Ibid.*, pp. 237ff.

〔訳注19〕本文はuntil they can show that their skirts are clearで、衣類の裾が汚れる現場労働者でなければとの意味であろう。

に一部は起因したし、彼らが決議に賛成票を投じるよう指示されていたとしても、彼らの多くは少なくとも怒りの抗議の声を張り上げる機会を与えられずにそうするのを拒否した。ミッチェル自身がこの大会で話した後、そうした感情は激化した。ミッチェルはどんな聴衆に対しても感情に強く訴えられたし、今回もいつになくうまくできた。当代の人間の誰よりもそうした決議に強い影響を受けたが、UMW大会の決議に従って投票せよとの指示のもとで代議員として聴衆の前に立った彼は、自身がUMWのリーダーであった間に炭鉱夫が生み出した途方もなく大きな利益について語った。同時に、組織労働者と敵対するはずのないNCFの創設に手を貸したとも語った。彼は、年々歳々労働者と良好な契約を結んだ多くの使用者がNCFの会員にいたという事実を強調しつつ、NCFの活動を説明した。カーネギーを擁護し、USスチール社のヘンリー・フィプス (Henry Phipps) とハーヴァード大学のチャールズ・W・エリオット (Charles W. Eliot) の二人がNCFを辞めるよう求められたと述べた¹⁰⁵⁾。ミッチェルは、自身がNCFの会員であったことを炭鉱夫は一度も咎めなかったとも述べた。NCFからではなく、自身の組合から追い出すための運動が始まったのは、UMW委員長の職を辞した後だった。この決議はどのようにしてAFL年次大会に出されたのか。ミッチェルはそれが炭鉱夫の多数決での表明ではなかったと証明する準備を整えていたが、年次大会では自己弁護は求められなかった。「……私は、心に受けた苦痛のせいで、神が寿命を与え給う限り、先の所業がとられた時点で私を取り巻いていた状況を忘れない」。ミッチェルは、NCFの役員を務めた労働者側会員であった自身の人格とは関係なく、何が労働運動にとって大きな利益になるのかという先入観のない目的だけをもって懸案の決議が投票に付された、と抗議を込めて結論づけた。

ミッチェルの演説は当該問題に関する気運を多少なりとも高めるのに役立った。UMWの代議員 J・H・ウォーカー (Walker) は、UMW大会での投票の背後にあった裏表のある言行を詳述することで自身が演じる役割をこのドラマに付け加えた。それは、ルイスと彼の支持者がUMWを墮落させるのに1万ドル支払ったり、「ミッチェルを抹殺するだけの目的」で、NCFの非難を勝ち取った時の話であった。ウォーカーはイリノイの石炭労働者を支援すべくNCFの労働協約部座長としてのミッチェルの奮闘を詳説した。一方、ウォーカーが「ユダその人以降の最大のユダ」と思ったUMW内の人物 (ルイス) は、炭鉱経営者協会 (Coal Operators' Association) と秘密裏に協力し、背後から労働者の闘争心を削ごうとした人物を中傷した。ウォーカーは、UMWに関する限り、炭鉱経営者が用いた道具を自身のためのプロパガンダ・キャンペーンを得る手段として使ったと労働者が信じない場合は、当該問題にのめり込むことはないだろうとの鋭い判断を下した。通常、このような「裏切りやすい人間」は、偽りのない信念に基づいて行動する無実の人物を用いるのに反対した。ウォーカーは、ミッチェルと他の労組幹部が労働者のために何か行えたとの真摯な信念でそこに赴いたと信じたが、自身は間違

105) 後にイーズリーは、ミッチェルの語ったことが弁明全体の唯一の「分岐点」であったと述べた。それは「組合のとんでもない戦術」のせいであったが、エリオットとフィプスの二人はNCFを自ら進んで辞めた。R. Easley to A. Belmont, December 5, 1911, copy, E-NYPL.

いなくNCFと対峙した。

（後にウッドロー・ウィルソン政権の初代労働長官になった）UMW代議員のウィリアム・B・ウィルソン（William B. Wilson）も、UMWの要求の合法性に疑義を表明した。彼は、傘下の組織がAFLの組合員に資格を付与する権限を有していたかどうかを疑った。さまざまな意見を表明する公開討論の場を提供し、団体交渉を奨励したNCFの2つの異質で明確な目的は擁護した。労働組合運動は攻撃的であればならず、置かれた状況を変えるには、企業を支配する人物と可能な限り親密な関係になれるあらゆる機会を活用すべきである。指示通りの投票を強いられたが、決議委員会の報告書には心底同意したウィルソンは、年次大会でUMWの幹部が敵に表明した意見が信頼できない場合、その幹部を解任し、問題点を明確で、公明正大で、疚しい所がないものにすべきだと警告した。

AFL副会長たちとNCF所属の種々の国際組合の幹部の何人かが、順に立ち上がってNCFでの経験を率直に語った。彼らはNCFが相当肩入れしたストライキ状況を詳細に論じた。炭鉱夫の何もしてもらえなかったとの批難に反駁するため、AFLのダンカン副会長は1902年の大石炭ストライキにおけるNCFの活動について語った。マホーンはインターボロー社でのストライキの現場で入手した情報を提供し、自分の組織の執行委員会の特別な教唆でNCFに加盟し、自身もベルモントに加盟するよう説得した一人であったと語った。火夫友愛会のティマシィ・ヒーリーは、NCFが同友愛会のために行った現実の善（positive good）に言及した。NCFと対峙する反組合を標榜する使用者に関する数多くのコメントがあった。国際活版工組合委員長のジェームズ・M・リンチは、年次大会で表明されたNCFへの敵意のほとんどが、NCF所属の「誠実な」労組幹部に向けられたものであったという事実を指摘した。AFLのヘイズ副会長はこう叫んだ。「労働者側の代表に麻酔をかけて催眠状態にする話のすべてが目みえなくした。なぜ人は我々がいつまでもニューヨーク市民（knickerbockers）だと考えるのか」。

自身のために社会主義者に攻撃を仕掛けるという愉快な仕事を取っておいたのはゴンパーズ会長であった。彼は、社会主義者がAFLを支配しようとしたのであって、労働運動内の生真面目な人間への配慮というAFLの目的とまったく無関係な問題を社会主義者が提起したのは、彼らにとっては大した問題ではなかったと語った。社会主義者がこの問題で勝てば、敵意を掻き立てるためにもう一人別人を連れて来る。彼は資本家との協力関係に対するヨーロッパの社会主義系新聞の厳しい攻撃に言及し、それをこの国の反組合を標榜する使用者と社会主義者の痛烈な非難と対比した。彼はNCFの活動を説明し、自身のNCFでの発言を批判するすべての人物に異議を申し立てた。NCFの会議での労働者側会員の言辞は、組合の集会所で行っているものよりも急進的で、粘り強いものであった。彼らの承認なしに何らかの提案がNCFから公表されることは一度もなかった。諸部門を介して行われた活動について、NCFがそうしたやり方を非難されたのは、それが単に議論されただけだったからではなく、「NCFは議論し、合意に至った……事柄を行おうとした」からである。ミッチェル同様、ゴンパーズは自身が関

係した団体の長いリストを読み上げ、次に社会主義者の要請でそうした別の団体からも辞任すべきかどうかを問うた。

長い闘いは終わった。決議委員会報告書を採択する動議に関して点呼採決がとられた。ミッチェルを含む全UMW代表団は反対票を投じた。総計で賛成は11,851票、反対は4,924票であった¹⁰⁶⁾。AFLは招集された年次大会での社会主義者の主張を却下し、経済闘争中心の組合主義というAFLの方針を遂行する合法的手段としてNCFを活用すると幹部の決定を支持した。もちろん、この問題は相変わらず物議を醸した。社会主義者は黙っていなかったし、平組員は依然として労組幹部と資本家との協力関係という先人の知恵を疑ってかかった¹⁰⁷⁾。

論争全体でとりわけ興味深かった結果の1つは、ラルフ・イーズリーが社会主義に示し始めた態度であった。彼は常に社会主義の哲学に常に反対し、社会主義に対抗する一種の公開キャンペーンを始めてみようかと何となく考えていた。しかし、自身とNCFがこの国の進歩の擁護者としての役割を担っていると心に描き始めたのは、おそらく1911年の長い論争後のことであった。UMWの年次大会での感情の爆発もNCF内の労働者側会員の考え方に影響を与えた。NCFが社会主義者に反対する世論の先導に手を貸すなら、その好機に乗じなければならない。社会主義者の論法は極端な急進主義という当時の背景のなかで理解されなければならない。

社会主義が国民の生活全般に最大の影響を及ぼした時期が、1902～1912年であったことはすでに指摘した。主要なトレンドのなかの2つがこの国の労働運動に重大な帰結をもたらした。社会党の「右派」は自身の政策で合法的な労働組合主義に勝利しようと内側からAFLを操り、反体制派「左派」と急進的な西部の労働組合主義者の結合から世界産業別労働組合^Iが1905年に誕生した。革命的な戦術に傾倒したIWWは、不熟練労働者と西部の移民労働者^Wの間ですぐに地歩を固め、AFLが組員を獲得できていなかった東部の未組織移民労働者の組織化で主導権を握る準備を1909年までに整えた。それ以降、自然発生的なストライキが東部で広がった。それは、IWWがかなりのリーダーシップを行使できた流血を伴う争議であった。IWWは暴動を本当の闘いに十分変えられたが、残念なことに恒久的な労働団体としては自立できず、1913年以降は組員数と影響力がともに急減した。革命的な組合主義のこうした示威的運動は、不熟練労働者の組織化をより真剣に検討する方向にAFLを駆り立てたが、おそらくAFLの保守

106) *AFL Proc.*, 1911, pp. 227ff, 235ff, 249ff, 257.

107) 次の年、組員はNCFの会員にはなれないことを規定した決議案が国際製巻工組合 (International Cigarmakers' Union) の年次大会に提出された。決議案が適用される唯一の存在であったゴンパーズは、日頃の迫力で、「違法で、不公平で、思いやりのない……危険な提案」から自身を守った。この提案はゴンパーズ執行部への強い反感にもかかわらず圧倒的多数で否決された。G-AFL ; and S. Gompers, *Seventy Years*, op. cit., II, 115-116. 前掲邦訳書、下巻、224～25ページ。

1908年からNCF執行委員会の名誉幹事を務めていたレールロード・トレインマン (*Railroad Trainman*) 誌の編集者D・L・シーズ (Cease) は、1916年にNCFを辞任した。彼はイーズリーに自分がNCFの目的に対する深い尊敬の念を抱き続けていたと確信をもって語ったが、「自分の信じることを試みるのが面倒くさくなったことを、極めて多数のNCF会員によって意図的に間違った意味にとられた。そのような会員に仕える限り、彼らの理想に合うべきだと思う」とも語った。Cleveland, November 3, 1916, E-NYPL.

的傾向もより強まった¹⁰⁸⁾。

AFLの幹部がこの時期に保守的傾向を誇示しようとした理由がもう1つあった。全国建設業者協会（National Erectors' Association）に代表されるUSスチール社と国際橋梁・構造用鉄材労働組合（International Association of Bridge and Structural Iron Workers）との生死を賭けた闘争が、1907年から1911年に及ぶテロ戦術を結果としてもたらした〔訳注20〕。同組合は鉄鋼業の種々の現場をダイナマイトで意図的に爆破した。その最高潮に達した出来事は、多数が殺傷されたロサンゼルス・タイムズ社ビルを爆破した1910年に起こった。それに続いて起こった、1911年に広く世間に喧伝された有名な「マクナマラ事件」は〔訳注21〕、マクナマラ兄

108) Paul F. Brissenden, *The IWW, A Study in American Syndicalism* (Vol. LXXXIII in *Studies in History, Economics, and Public Law* [New York: Columbia University Press, 1919]), pp. 57ff.

〔訳注20〕 1908～11年に、国際橋梁・構造用鉄材労働組合の組合員は87発の爆弾を炸裂させたが、訳注21に出てくる「ロサンゼルス・タイムズ」社のビル爆破以外は、損傷を与えるまでに至らなかった。

〔訳注21〕 マクナマラ兄弟の事件とは、国際橋梁・構造用鉄材労働組合の会計担当書記（secretary-treasurer）であったジョン・J・マクナマラ（John J. McNamara）と弟のジェームズ・B（James B.）が、1910年10月1日にロサンゼルス・タイムズ社の本社ビルにダイナマイトを仕掛け、それが爆発して20人近くが亡くなり、50万ドル以上の損害が発生した事件のことである。当時、兄弟の逮捕はでっち上げ（frame-up）とみられていたが、クラレンス・ダロー（Clarence Darrow）が弁護団の首班となって死刑を免れるため司法取引し、兄弟は有罪判決（終身刑と懲役15年）を受け、収監された。

この事件の背後には、ロサンゼルス・タイムズの所有者兼発行人であったハリソン・G・オーティス（Harrison Gray Otis）が、反組合色を鮮明にしていた使用者団体を支援していたという事実があった。1910年夏、サンフランシスコの組合主義者がロサンゼルス建設業を組織化するキャンペーンを始めた時、ロサンゼルス・タイムズは使用者側の代弁者を務め、同年6月1日にストライキに入っていた金属業労働者を煽った。結果、金属工組合は自分たちの交渉上の立場を改善すべく産業テロ（industrial terrorism）に走った。このやり方は、建設業界では、オープン・ショップに向けた運動を展開していた全国建設業者協会（National Erectors' Association, NEA）との闘いで有効に機能したものであった。1908～11年に、国際橋梁・構造用鉄材労働組合は87発の爆弾を炸裂させた。その多くは損害を与えるまでには至らなかったし、1910年10月の爆発以外は人命を損傷したものはなかった。

サミュエル・ゴンパーズとAFLは兄弟の釈放を求める運動を展開し、労働運動も兄弟は潔白で、ビルの爆破はオーティスの注意義務違反（negligence）が原因だと主張した。1911年のレイバー・デイはマクナマラ・デイに改名され、多くの群集が全米各地で兄弟の釈放を求める運動を展開した（以上の記述は次を参考にした。Eric Arnesen ed., *Encyclopedia of U. S. Labor and Working-Class History*, Routledge, 2007.）。

ちなみに、クラレンス・ダローは、オハイオ州生まれのシカゴで開業した弁護士で、彼が弁護した事件のなかには、1895年のユージン・V・デブス裁判（訳注4の拙稿を参照）がある。

蛇足ながら、本文でもう少し後に登場する合衆国労使関係委員会（United States Commission on Industrial Relations）は、この爆破事件が示す険悪な労使関係の実態や労働時間に関する調査の必要性が喚起されたことが契機となって1912年に設置された。同委員会の注目すべき特徴は、それがNCFの鼎立構造と同様、公益（一般大衆）、資本、労働を代表する各3人の委員で構成されていた点にある。いわゆる「利益代表方式」が導入されるとともに、ゴンパーズが念願としていた労働と資本の対等性も明示された。

弟だけではなく鉄材労働者の組合の幹部も巻き込んだ。マクナマラ兄弟の無罪主張とダイナマイト爆破という暴挙に対する組合幹部の罪を信じなかったAFLの執行委員会は、被告人に代わって労働運動に訴えた。組織労働者にとって、それはただ無情な使用者と対峙する罪のない組合の事件であった。1911年12月のマクナマラ兄弟の自白と翌年の鉄材組合幹部38名の有罪判決は、労働者とその支援者にとって大変なショックであった。組織労働者の威信は、世間には修復不能まではいかないまでもかなり傷ついたと写った¹⁰⁹⁾。

マクナマラ事件のせいで敵対的な世論に直面した労働組合運動は、鉄材労働者の暴力行為が労働者に独自の政治行動をとる機会の提供を拒否したAFLに原因があったと主張する右派社会主義者の嘲笑に耐え、団体交渉機構が挫折したかにもえた1912年から1914年までの長期の産業界の動揺に立ち向かった。1913年の民主党の勝利で頂点に達した政治活動と立法活動に意識を集中するとともに、AFL幹部は社会主義を妨げる機会であればいかなるものであれ歓迎した。こうした展開が、NCF首脳の反社会主義活動が企画されなければならなかった背景にあったのである。

イーズリーの考えを反社会主義キャンペーンへと誘ったのは社会党のモリス・ヒルキットであった。ヒルキットは、イーズリーとの共同で書いた文学作品のコピーが1911年のAFL年次大会で「丹念に回覧されていた」のを目にしていた。彼は、自身とNCF会長との公開討論が「争点をかなり明確化するのを助ける」かもしれないので、対等な条件であれば、会合の準備を整える責任を「喜んで」引き受けると示唆した¹¹⁰⁾。討論への誘いは、友人のゴンパーズと同じぐらい白熱した戦いに熱中していたイーズリーのためであったかもしれない。しかし、ゴンパーズは明敏なヒルキットに太刀打ちできなかったし、自身もそれを知っていた。ゴンパーズは彼に、次のような経験があるから自分はいかなる討論もしたくなかったと語った。ゴンパーズは、「あなたはその種の活動に対する準備を整えておられるが、私がそうではありません。私は専門家との討論を初めて経験するのです。かつてシカゴで単一課税論者と討論し、すべての野望が彼らの主張に沿って矯正された苦い経験が私にはあるのです……」¹¹¹⁾と語った。

二人はまず討議し、来る夏に1週間すべてを費やして、社会主義とその教義が抱える全問題に関する真剣な議論を「二人とも何事にも狼狽せずに」行くと最終的に決定した。それは200人か300人以上収容できない公会堂で、二人が入場券の半分ずつをもつ形で行われ、合同委員会が論題を起草し、それを論じる専門家も選考した。この公開討論の目的は聴衆に影響を与えることではなく、著述家と講演者の参考書として活用できる逐語的な記録を確保することであった¹¹²⁾。

社会主義者の運動を防ぐ準備を整えていなかったNCF首脳の早まった決断であったにもか

109) Perlman and Taft, *op. cit.*, p. 318ff.

110) M. Hillquit to R. Easley, New York, November 21, 1911, copy, G-AFL.

111) R. Easley to M. Hillquit, November 22, 1911, copy, E-NYPL.

112) R. Easley to A. Belmont, August 30, 1912, copy, E-NYPL.

かわらず、イーズリーは反社会主義を公表する機が今や熟していると彼らに確信させるのが難しいとは感じなかった。彼は多くの同僚とこの問題について話し合った。同僚とは、ジョン・ヘイズ・ハモンド、チャールズ・R・ミラー（Charles R. Miller）〔訳注22〕、オーガスト・ベルモント、ゴンパーズ、ミッチェルであった。ミッチェルは、数多くの「非常に強力な3つの反社会主義運動下にいたカトリック後援者」¹¹³⁾や「人類と宗教を前進させる運動（Men and Religion Forward Movement）」のキャンペーンからちょうど戻ったばかりのチャールズ・ステルズリー牧師（Reverend Charles Stelzle）とも依然交流していた。この国中の社会主義者がこの「運動」を攻撃したので、社会主義者と対峙する際に「カトリック教徒と手を結ぶ」準備を整えたという「運動」の扇動的な発言はプロテスタントを奮起させた。以前、これらの人々は自分たちが自由に使えるあらゆる宣伝手段——すべての雑誌、新聞、さらには多くの説教壇すら——をもっていた。だが今や、産業経済部を介してNCFはそうした攻撃の機会を活用し、社会主義の欺瞞性を論駁するキャンペーンを始めようとしていた。社会主義のあらゆる側面に関して国民を啓蒙する討論の準備を整えた産業経済部を介して、8～10人で構成される代表委員会を招集するのに困まることはなかった¹¹⁴⁾。

こういった人物あるいは環境がイーズリーとヒルキットとの討論会に水を差したのかに関する証拠は何もない。討論会は実現しなかったし、NCF関係の往復書簡にはこの構想に関するさらなる言及は見当たらない。しかし、イーズリーにとって、討論会はより大胆で、彼がより好きな計画の下準備であった。

1912年の春から夏にかけて、NCFの代表がニューヨーク市の市民委員会と一連の協議会を開催し、少なくとも50人が複数の会議に出席した。長時間に及ぶ議論の後、社会主義者を対象にした、好戦的なキャンペーンと建設的なその2つのタイプのキャンペーンの実施が最終的に決まった。両キャンペーンは別々に実施する予定であったし、活動の好戦的な部分はカトリック教徒の「コモン・コース（共通の目的）」一派に引き継がれた。市民委員会は、NCFがプ

113) 著名なカトリック教徒のグループが1912年初刊の新雑誌、コモン・コース(*Common Cause*)の発行を支援していた。これは新しく組織的な反社会主義運動の始まりを象徴すると思われた。社会主義への敵意で傑出していた別のカトリック教徒のグループは、アメリカ・カトリック社会連盟(American Federation of Catholic Societies)とドイツ・カトリック教徒中央連盟(German Catholic Central Verein)であった。それまで社会主義者で、当時はカトリック教への改宗者であったデイヴィッド・ゴールドシュタイン(David Goldstein)が、この中央連盟の後援下で反社会主義講話をしばしば行っていた。もう1人のカトリック教徒で同じ活動に従事していたのが、電気工友愛組(Brotherhood of Electrical Workers)の前国際担当書記のピーター・コリンズ(Peter Collins)であった。イーズリーはこの時期、この二人と懇意にしていた。1919年と1920年に、彼はNCFレヴィー誌で二人の講話を公開し、その歯に衣着せぬ社会主義の糾弾に熱狂した。

114) R. Easley to N. M. Butler, January 8, 1912, copy, E-NYPL.

〔訳注22〕ミラーはここにしか登場しておらず、その来歴は不明である。*Who was Who in America, Volume I, 1897-1942* (Marquis Who's Who, Inc., 1960.)には、知事、編集者、弁護士という3人のチャールズ・R・ミラーの記載があるが、いずれも決め手を欠き、当該人物とは断定できなかった。今後の課題としたい。

プログラムの建設的な部分に着手する最良の準備を整えていると信じていた。市民委員会は、最近数十年間のこの国の経済的・社会的な状況の改善に関する真相の解明を国民の手に委ねるつもりであった。現代のこの国の社会に関する入念かつ包括的な調査が行われ、現下の状況と以前の状況が対比されれば、調査で得られた結果が大きな説得力をもつのは確かなので、状況が良くなるというよりは悪くなっているとの信念に基づく社会主義者のプロパガンダは、まったく無力化されないまでも弱められたであろう¹¹⁵⁾。

構想全体にはイーズリー流の趣があった。アイデア自体は労使関係委員会 (Commission on Industrial Relations) の創設に向けて、同年夏に連邦議会会議室で議論された構想の改作であったが、確かに彼流の発想でもあった。マクナマラ兄弟の裁判での扇情的な摘発の後、種々の社会改良グループは革命が迫っていると考えた。彼らは、産業を取り巻く状況を全国規模で調査し、次に労資間に緊張をもたらした原因を連邦議会に報告する委員会の創設を強く主張した。AFLはこのプロジェクトを支援し、労使関係委員会創設法案は上下両院の労働委員会 (Labor Committees) を通過した¹¹⁶⁾。イーズリーは、労使関係委員会のための構想を新たに立て始めた「急進論者」を端から軽蔑したし、それで自身は「政治的社会的な探究」とみなされない調査にとって良案と考えたものを開発した¹¹⁷⁾。

NCFの「社会的・産業的・市民的進歩に関する調査」は壮大な規模での実施の様相を帯び始めた。それには100人以上の男女下院議員で構成される全国委員会が資金提供すると考えられた。関係資料は質問票で入手する予定であった。1つの質問票は、3,000の市と町の状況を比較できるように、重要な地方自治体すべてに送付された。使用者宛ての特別質問票からは、労働条件を改善するために彼らが何をしていたかに関する情報が入手できた。歴史的視点からする研究も、19世紀初頭に一般的であった労働条件について行われる予定であった¹¹⁸⁾。NCFのある委員会が、プロジェクト用に5万ドル集める計画を立て、熱心に取り組んだ¹¹⁹⁾。

この国の発展に関する将来像がイーズリーを悩まし始めた。彼はこの問題に関する論文を準備し、それはゴンバーズの鋭い観察眼で慎重にチェックされた。イーズリーは書き上げた論文に強い思い入れがあったので、1,000部をこの国中にある労組幹部に送付することを提案した¹²⁰⁾。論文のなかで彼は、社会主義者や他の急進派の著述家と講演者が強調した「不安」は、社会的・産業的な分野に限れば健全で、普通のものであったと主張した。彼は、過去25年間に

115) Form letter to Seth Low, July 23, 1912, L-COL ; and R. Easley to J. Mitchell, New York, August 2, 1912, M-CUA.

116) Memo, "Early History of the Proposed Commission on Industrial Relations," sent by R. Easley to Mrs. J. B. Harriman, March 11, 1913, E-NYPL.

117) R. Easley to S. Gompers, July 2, 1912, copy, E-NYPL.

118) MS, "A Proposed Inquiry Into Social, Industrial and Civic Progress," sent to J. Mitchell, August 2, 1912, M-CUA.

119) R. Easley to A. Belmont, August 30, 1912, copy, E-NYPL.

120) *Ibid.*

AFLや鉄道友愛会が行ってきた有益な立法行為や数多くの改革といった功績を列挙し、アンドリュー・カーネギー、ジョン・D・ロックフェラー、エドワード・H・ハリマン夫人（Mrs. Edward H. Harriman）、ラッセル・セージ夫人（Mrs. Russell Sage）〔訳注23〕らが推進した社会面・経済面での改善を称賛した。イーズリーはNCFの活動を詳述した。地方自治体の公益事業会社と国民との関係で後者の考えに及ぼした著しい功績、ルールに従うよう教導されたトラスト、このようにして「我々の倫理基準と我々の目標は際立ってより高貴なものとなった」。進歩は、理想とは程遠かったが、途方もなく大きかった。イーズリーは極度の楽道家ではなかった。NCFの福利厚生部の記録は産業界の惨事の一覧表を提供したが、この同じ記録によって多くの使用者が惨事に直面しているのを示せし、「教育と適切な運動を通せば」、そうした惨事に対処できるという信念を正当化できた。過去1年間に、ある大企業は改善活動〔訳注24〕に500万ドル使っていた¹²¹⁾。

1913年5月のNCF執行委員会の会議で産業経済部の再編成が検討されたのは、産業界の調査を支援するのが目的であった。同部の新たな目的は、「マルクス主義者の社会党員の経済提案、次に『職業別組合主義（craft unionism）』と『産業別組合主義（industrial unionism）』との論争に関する問題、最後に労働組合運動と社会党ならびにIWWとの根本的な相違、の科学的調査」にあった¹²²⁾。ミッチェルは、再生した同部が提起した活動を批評するよう求められ、指名された諮問委員会に5～6人の有名な健康関係の専門家を追加し、さらに数名の女性議員が参加すれば強化できると提案した。彼は諮問委員会を「途方もなく強い」と特徴づけたが、多数の推薦されたメンバーが個人的にはどちらかと言うと現状に満足する理由を十分もっている人物であったと躊躇わずに付言した。「しかしながら、これはうまく避けられないと思うし、実際の活動が事実だけを知ろうとする専門家によって行われ、結論が事実から引き出されるにつれ、諮問委員会の構成についての批評は必要でなくなった」¹²³⁾。

産業経済部の新たな方針は、それが最終的に採択された時には、NCFが反急進主義に関しては発展途上にあるのを見事に物語った。この国の政治制度とその根幹をなす経済制度を存続

121) R. Easley, "Social, Industrial and Civic Progress," *Bankers' Magazine*, LXXXV (November, 1912), 514 ff. これは1912年10月1日にインディアナポリスで開催された全国自然保護会議（National Conservation Congress）での式辞としても披露された。

122) S. Low to S. Gompers, New York, May 6, 1913, G-AFL.

123) J. Mitchell to R. Easley, September 19, 1913, copy, M-CUA.

〔訳注23〕ハリマンはユニオン・パシフィック鉄道の執行役員（1897～98年）、1901年にはサザン・パシフィック鉄道を買収して社長に就任した。彼は両鉄道を統合しようとしたが叶わなかった（実現したのは1996年）。ちなみに、日露戦争時の戦時公債500万ドル分をジェイコブ・H・シフ（Jacob H. Schiff）とともに引き受けるなどわが国との関係も深い鉄道王の一人。一方のセージは、マンハッタン高架鉄道の主要株主であった。

〔訳注24〕改善活動と言えばトヨタなどでの小集団活動を想起するが、ここではbetterment workのことで、当時福利厚生（welfare work）を推進する運動を、industrial betterment movement（産業改善運動）と呼んでいた。詳しくは、伊藤健市『アメリカ企業福祉論』（ミネルヴァ書房、1991年）を参照のこと。

させようとするなら、社会主義と無政府主義の本質に関して世論に影響を与える、慎重に計画されてうまく方向づけられたキャンペーンの要請が非常に強いことがわかった。粘り強くて巧みなプロパガンダが、自身の信念を心底から確信し、世間から高く評価された数多くの人々に支持される社会主義教義の急速な拡散に寄与していた。それで、説得力のあるキャンペーンが巧みかつ手際よく行われなければならなかった。持続的で説得力のある分析が、社会主義的な提案と無政府主義的な提案に対してなされるはずであった。攻撃を受けている制度——個人の自由、私有財産、契約の神聖さ——の基本的な性格を具体例が例証するので、世論の啓蒙は次の3つの方法で行うのが最善だと考えられた。まずは、急進的な動向を説明し、既存の産業秩序を守る立場からこの国の新聞に提供される、うまく纏められた面白い記事によって。次に、これと同じ内容を、教養があって機転の利く人気ある講演者が、この国中にある会員制組織や種々の研究所で議論することによって。最後に、以上の点の奨励と、もし必要なら多数の読者に望ましい物の見方を提供する普及版の準備によって、である。キャンペーンの成否は、そうした著作物の見識と講演の説得力で決まった。

社会主義には全人類のためになるとの願いに基づく感傷面での優位さがあるので、それに対抗する際には、この同じ感傷面での優位さがあると主張しつつも、反社会主義的な視点を保たなくてはならない。

社会主義と無政府主義の詳細かつ具体的な定義を確定し教えることも非常に重要である。原理的には社会主義で無政府主義的な提案と直接の企てと、既存の産業秩序の根底にある原理と必ずしも矛盾していないものの、社会主義者と無政府主義者が当然好む提案と直接の企てとを峻別するのが重要である¹²⁴⁾。

産業調査は1913年と1914年を通して続いた。それに関する資料の収集は、時間を掛けてもやらなければならない作業であった。1914年初頭、NCFは、組合と交渉していた先駆的な使用者の一覧表の提供を要請する手紙を労働者側会員全員に送付した。労働者側会員は「最も同情的で、可能性のある」人物を推薦すると思われた。できる限り多くのこうした使用者が調査委員会に組織されるはずだった。こうした公正な使用者の考え方の累積された効力が世間に照準を定めた場合には、「組合不在の使用者が広めている組合に対する偏見と虚偽に満ちた陳述を無効にする際に大いに役立つ」¹²⁵⁾のである。

1914年3月、NCFは作業を継続する目的で400人以上のメンバーを擁するNCF内で最強の委員会の1つを組織したと発表した。そこには、専門家と市民を代表する25人で構成される小委員会があった。これは、国民生活のすべての領域の権威者の最強集団となり得るものであった。政府機関はその作業に協力したがったし、労働組合、特にAFLの幹部は調査に心底のめり込

124) Memo, "Concerning the Policy to be Pursued by the Department on Industrial Economics of the National Civic Federation" (ca. 1913), E-NYPL.

125) Form letter to J. Duncan, New York, January 23, 1914, G-AFL.

んでいたし、企業経営者も関心を示していた。作業は「社会の進歩を支援したいと思っていた人々に向けた、整序された事実とこの国の記録の重要な宝庫」¹²⁶⁾になると思われた。

1915年の年末も膨大な報告書は引き続き作成され、修正も施された。産業調査は、労働者側会員がその結果に反対するなど、明らかに思いがけない多くの障害に直面した。その筋からの辛辣な批判は、機関士友愛会会長のウォーレン・S・ストーン（Warren S. Stone）の執拗な抗議で証拠づけられる。彼は前もって提案を示し、「常習的な反対者（chronic kicker）」となる立場に置かれたくはなかったが、報告書には基本的な論理的欠陥があり、分析の試練に耐えられないとの信念をもっていた。NCFが指摘したように、報告書は組織労働者に公平でないのはもとより、NCFの立場と威信を確実に下げるという結果ももたらした。それは「ばかばかしい作業」であって、ただ資本主義体制派の新聞に論拠の薄弱な資料を提供できただけだった。ストーンはイズリーに、「自分は社会主義者ではないが、当該委員会が社会主義者の主張の誤りを立証するのを切望したがっているだけで、それ以外何もみえてないように思える」と念を押した。新聞への公示は内容を訂正する前に送られたし、労働者が広く引き合いに出されていたので、彼らの大義が大ダメージを被ったのは残念であった。ストーンは一例を示した。彼が行った鉄道業調査は、発行済み有価証券に対する利率が通常の6ないしは7%に近いものであったが、投下資本利益率は非常に高かったことを示していた。一方報告書は、産業生産高で資本の取り分となる割合はより小さくなるか、あるいは一步さらに進めて、投下資本に対する利子率が下落した点を指摘していた。彼は報告書の発行で何が得られるのか理解できなかった¹²⁷⁾。

最終的に産業調査の秘匿に至ったのは、ストーンのような人物の強力な批判のせいだけではなかった。合衆国労使関係委員会（United States Commission on Industrial Relations）は、1914年に全国で公聴会を開催した。この国の歴史で初めて使用者階級が世論の裁きの場に引き出された。不公正な労働条件や苦痛と窮乏が証言され、報告書（staff report）は産業上の災難に対する救済策として労働組合主義を提案した¹²⁸⁾。イズリーは、同委員会が「善意はあるが、嘆かわしいほどに間違った社会慈善家と慈善事業労働者……」の一派の説明によって過度に印象づけられたという事実のせいで、蔓延する不安をあまりにも強調しすぎると考えた。議会は、どういった異常な不安があったのか、その原因はどこにあったのかの確認を同委員会に指示したほうが良かったし、過去数十年間の産業面・社会面での進歩も調査すべきであった。そうした点の論証はこの国が経済的に大きく腐敗していたので、協同共和国（cooperative commonwealth）〔訳注25〕だけが救えたと言間に吹聴していた人たちにとっては痛烈な一打と

126) "Social Survey Enlists Nation-Wide Support," *NCF Review*, IV (March, 1914), 1; and "A Remarkable Year of Progress," *ibid.*, 21-24.

127) W. Stone to R. Easley, Cleveland, November 11, 1915, G-AFL.

128) Perlman and Taft, *op. cit.*, p. 164.

〔訳注25〕協同共和国とは、賃金奴隷制（資本主義）に代わる制度を想定する際の合い言葉。全国労働組合や労働騎士団は、生産協同組合からなる社会を理想とした。K・マルクスも積極的に評価した。

なった¹²⁹⁾。イーズリーがそれについて何を思ったかは別にして、政府の公聴会と報告書は、1914年と1915年を通して広範な批判と批評を喚起した。NCF首脳陣は、おそらくこの事実と、ヨーロッパで勃発した悲惨な戦争のせいもあって、この国の種々の研究所による楽観的な分析を削除するのが賢明だと考えた。これら研究所の調査が最終的に公表されたのは、環境が大きく変わった10年後であった。イーズリーの楽観的観測が揺らぐことはなかったが、戦争とその余波はこの国の急進主義に大きな変化を引き起こした。社会主義とその所産に対する彼の闘いは、時代の変化とともに別の性格をもつものになったが、この問題は別の章で取り上げる予定である。

少なくともイーズリーは、労使関係の舞台で組織労働者の敵と闘った15年に及ぶ建設的な活動の時代を振り返れたし、自身と同僚がNCFを堅牢に構築したのを確認できたと思った。本章では、イーズリーと彼の同僚の活動の本質と重要性に関するより踏み込んだ検討を試みた。それと言うのも、そこにある背景を明らかにすることでのみ、NCFがこの国の労働運動に対して行った真の貢献が評価できるからである。NCFの敵の痛烈な批判と、そうした批判に対抗しようとするNCFの奮闘——それは時にまったくもって不成功に終わった場合もあった——を詳述したので、この先にはNCFの首脳陣が進路の舵をそこに向けて切った、より深部にある労働組合主義の潮流の盛衰を跡づける課題が残されている。

129) R. Easley, "Will Democratization of Industry Cure Unrest?" 1914年8月にニューヨークのシルヴァー・ベイ (Silver Bay) で行われた講演。G-AFL.